

[資料紹介]

東北大学文学部百周年記念事業・デジタルミュージアム “歴史を映す名品”

柳原敏昭，高橋章則，大木一夫，仁平政人，堀裕，鹿又喜隆，藤澤敦，西村直子，
矢田尚子，齋藤智寛，長岡龍作，杉本欣久，阿部恒之

令和4年(2022)，東北大学文学部は創立100周年を迎え，その記念事業の一環として文学部のホームページ上にデジタルミュージアム“歴史を映す名品”を開設，公開する運びとなった。

本学の附属図書館には，「知の巨人」と評される狩野亨吉(1865～1942)が収集した古典籍の宝庫「狩野文庫」や，文豪・夏目漱石(1867～1916)の旧蔵書や遺品をまとめた「漱石文庫」など，文学部の研究にゆかりの深い歴史資料が数多く収蔵されている。一方，発掘や調査によって収集された考古遺物が考古学研究室，宗教家の河口慧海(1866～1945)によって入手されたチベット資料が東洋・日本美術史研究室によって管理されるなど，貴重な実物資料も伝わる。当初はこれらの資料を展覧会として展示公開し，多くの方々の高覧に供する計画がなされていたが，残念ながらコロナ禍の影響を受け，規模を縮小したウェブ公開へと方針転換せざるを得なくなった。

けれども，デジタルミュージアムという形態にもメリットはある。展覧会のようにその場かぎりで終わってしまうのではなく，ウェブ上のコンテンツとして継続発展させることが可能な点である。さらに，貴重な資料を美しい画像と詳細な解説を通じて広く世に発信できたことで，結果として多くの方々が文学部の存在意義を再確認するきっかけとなったのは，まさに不幸中の幸いだったといえる。

そこでいっそうの閲覧に供し，この100周年記念事業を記憶に留め置く意味も込め，ウェブ上の解説をほぼそのまま紙媒体としての本年報に掲載することとした。これにより，附属図書館および学内で管理される資料の重要性を再認識するとともに，改めて後世へ大切に守り伝えていくとの決意表明の場に代えたいと考える。

【はじめに～多彩な学術コレクション～】

大学院文学研究科長・文学部長 柳原敏昭

狩野文庫

最初に問題を出します。「国宝を持っている国立大学はいくつあるでしょうか。」

正解は4つ。東京芸術大学，京都大学，東京大学，そして東北大学です（このほか滋賀大学に国宝の寄託がある）。ちなみに国立大学は86あります。

東北大学の国宝は附属図書館の狩野文庫に収められた『史記』と『類聚国史』です。『史記』はいうまでもなく，中国漢代の史家・司馬遷の著作です。『類聚国史』は菅原道真が古事記・日本書紀など六国史の記事を神祇・帝王・災異・風俗など内容別に分類・編集した書物です。狩野文庫に収められているものはいずれも平安時代(!)の写本の一部です。

では，狩野文庫とは何でしょうか。これは，もともとは狩野亨吉という人のコレクションです。狩野亨吉は，現在でいえば秋田県大館市の人。「〇〇学者」の枠に収まらない，「知の巨人」としか言いようのない人です。この人がまた大変な収書家，コレクターでもあり，古今東西の書物，地図，絵本，絵はがき，果てはマッチのラベルの類まで集めました。このコレクションが順次，東北大学に搬入されるのですが，その第一陣がやってきたのは1912年のことです。もちろんまだ文学部等の前身である法文学部はできていません。しかし，初代総長の沢柳政太郎が，将来，文系学部ができることを見越して，図書館の蔵書を充実させるために購入を決めたといわれています。ちなみに沢柳は狩野の親友でした。

10万8千冊におよぶ狩野文庫の中心は，江戸時代の書物です。ありとあらゆる分野がそろっており，「江戸学の宝庫」と呼ばれています。学外の研究者が，狩野文庫本閲覧のために図書館を訪れることを「仙台詣」というと聞いたことがあります。

漱石文庫

狩野文庫と並ぶ附属図書館所蔵貴重書の二枚看板は漱石文庫です。彼の文豪夏目漱石の旧蔵書・遺品です。実は漱石と東北大学とに直接的な関係はありません。では、なぜそのようなものが東北大学にあるのでしょうか。

夏目漱石が、自宅に有為な若者を集めて木曜会なるサロンを開いていたことはよく知られています。そこに集った人々は大正・昭和初期の文化を先導し、「漱石山脈」と称されています。法文学部草創期の教員だった小宮豊隆（ドイツ文学）、阿部次郎（美学・西洋美術史）は「漱石十大弟子」（漱石の小説の装丁を手がけた津田青楓の命名）に数えられていますので、まさに「漱石山脈」の高峰でした。小宮は小説『三四郎』の主人公のモデルともいわれています。

小宮は、1940年に附属図書館長となります。漱石はとうに亡くなっており（1916年没）、東京の早稲田南町にあった旧宅（漱石山房と称した）では、蔵書や遺品がそのままになっていました。小宮は漱石の遺族と相談し、附属図書館でそれらの譲渡を受けることとなります。搬入は1943年から44年にかけて行われました。時はアジア太平洋戦争の真最中、1945年5月25日の東京への空襲で漱石山房は焼失してしまいます。間一髪のところ、貴重な品々は難を免れたのです。

漱石文庫は、漱石の蔵書（ほとんどが洋書）、日記、ノート、さらには作品の草稿（『吾輩は猫である』序文、『道草』）など約3,000点からなります。蔵書の3割以上に漱石の書き込みがあり、文豪の思考の跡をたどれるのが特長です。漱石研究は、この文庫なしにはできないでしょう。ちなみに狩野亨吉と漱石は大の親友でした。また、小宮や阿部は、狩野が旧制第一高等学校（現在の東京大学教養学部の前身）の校長を務めていた時の生徒でした。

ところで、漱石文庫に少し先んじて附属図書館に取られたものにケーベル文庫があります。ケーベル（Raphael von Koeber）はドイツ系ロシア人で、1893～1914年の間、東京帝国大学で哲学・美学などを講じました。チャイコフスキーに直に教わった音楽家でもありました。その人物の旧蔵書がケーベル文庫です。内容は哲学・文学にかかわる洋書です。収蔵にあたって尽力したのは、小宮と久保勉（哲学）でした。久保はギリシャ哲学を専門とし、1929年から44年まで法文学部に在職しました。ケーベルの愛弟子でもありました。そして、実は漱石も学生時代にケーベルの講筵に連なっ

ており、師への敬慕の念あふれるエッセイ「ケーベル先生」をものしています。さらに阿部も小宮もケーベルの教え子であり、特に「大正教養主義」の代表的論者とされる阿部の学問形成には、ケーベルの教養論が深く関わっています。当初、附属図書館では、ケーベル文庫と漱石文庫が隣り合わせに設置されていたといわれています。上のエッセイで漱石がケーベル宅の書斎の情景を描写していることも考えると、とても興味深いものがあります。

チベット関係コレクション

二枚看板に次いで、附属図書館の蔵書で著名なのはデルゲ版西藏大蔵経でしょう。

西藏はチベットのこと、デルゲはチベットの地名です。デルゲ版西藏大蔵経は、デルゲで作られたお経など仏教に関する文献（仏典）の集大成です。デルゲ版はチベット大蔵経の最も良質なものとされています。この大蔵経をもたらしたのは、1935～44年に法文学部の講師だった多田等観です。秋田県の本願寺派寺院に生まれた多田は、西本願寺がチベットから招いた使節の世話係となりチベット語を修得します。そして1913年に苦勞の末、チベットに入り、9年半にわたり滞在します。そこでチベット仏教最上位のダライラマ13世の信頼を得て、大蔵経を下賜されたのです。東北大学にこの大蔵経が納められたのは1925年のことでした。

チベットつながりでいえば、文学部には、河口慧海請来チベット資料があります。河口慧海は宗教家であり、冒険家でもありました。1900年に日本人として初めて鎖国下のチベットに至り、1914年にも再入国し、仏典、仏像・仏画・仏具・民俗資料（以上を造形資料という）、各種標本などを持ち帰りました。そのうちの造形資料・標本からなる約1,400点が文学部のチベット資料です。1954年から55年にかけて、河口の遺族から譲渡されました。交渉に当たったのは亀田孜（東洋・日本美術史）、羽田野伯猷（インド学仏教史）でした。

ところで、なぜチベットの仏典は重要なのでしょうか。仏教はインドに発祥しましたので、仏典の原本は古代インド語（サンスクリット語など）で記されていました。一方、日本では古来、中国で翻訳された漢訳版が用いられてきました。ただし、それはあくまで翻訳です。仏教を究めたいと願う人々にとっては、原典にどのように記されているのかが大きな問題となります。しかし、原典には失われてしまったものもあります。

ところが、チベットにはそうしたものが、チベット語に訳された形でのこされていたのです。翻訳の精度も非常に高いといわれています。ここにチベット仏典のかけがえのない価値があります。

なお、もちろん多田と河口とは面識がありました。河口2回目のチベット入国時には、多田も滞在中で、ラサで面会し、年初だったので新年会を開いたといえます。

考古資料と古文書

現在、文学部も附属図書館も川内南キャンパスにあります。川内南キャンパスは、江戸時代には仙台城の二の丸（藩政の中心）があったところでした。

東北大学の文系学部が川内南キャンパスに移ってきたのは1973年のことです。それ以前、文学部も図書館も仙台市中心部の片平キャンパスにありました。もちろん法文学部もそうです。旧図書館は現在の東北大学史料館、法文学部の建物（第二研究室）も会計大学院研究棟としてのこされています（いずれも登録有形文化財）。その片平キャンパスの一角に小振りだけれども赤煉瓦で作られた瀟洒な建物があります。旧制第二高等学校の書庫でしたので、通称を赤煉瓦書庫、正式には考古学陳列館（あるいは文化財収蔵庫）といえます（こちらも登録有形文化財）。ここには、文学部の考古学研究室が管理する資料が収められています。

法文学部が設立された2年後の1925年、喜田貞吉が赴任します。喜田の専門は、日本古代史と考古学で、国史研究室（現在の日本史研究室・考古学研究室の前身）に属しました。彼は赴任すると早速、研究室内に**奥羽史料調査部**という研究機関を立ち上げ、東北地方、北海道、新潟県を主なフィールドとして資料の調査と収集に乗り出します。

喜田の収集したものでは久原コレクション、遠藤・毛利コレクションと呼ばれているものが代表です。順序が逆になりますが後者は、1909年から発掘された石巻市の沼津貝塚（国指定史跡）の縄文時代の出土遺物で、473点が「**陸前沼津貝塚出土品**」として国指定重要文化財となっています。文学部は、重要文化財をもっているのです（このほか陳列館に保管されている宮城県名取市経の塚古墳出土の埴輪も重要文化財）。久原コレクションは、青森県津軽地方を中心とする縄文時代の遺物です。後（1957年）に考古学研究室の初代教授となる伊東信雄らが整理を行い、5冊の目録（公開、公表はされていません）を作り上げます。伊東は、1933・34

年の二度にわたりサハリンを調査しました。その際に収集した資料も陳列館にはのこされています。

奥羽史料調査部は、古文書など文献史料の調査・収集も積極的に行います。現在、附属図書館所蔵となっている秋田家史料、文学部日本史研究室所蔵の朴沢文書、鬼柳文書は、本来、奥羽史料調査部が収集したものです。これらには中世の古文書が数多く含まれています。中世以前の古文書を大量に保有する大学は全国的に見てもそう多くはありません。**秋田家史料**は、津軽の豪族安藤氏を先祖とする近世三春藩主秋田家に伝わった一括史料です。

このほか図書館には中世文書を多く含む倉持文書、森潤三郎氏旧蔵米原文書があります。いずれも戦後になって寄贈されました。前者は鎌倉時代の足利氏に関する古文書がたくさんあるという希有な文書群です。また、後者の森潤三郎は鷗外の実弟です。歴史家・書誌学者であり、鷗外の史伝的小説の執筆を支えました。東北大学には漱石だけでなく、鷗外ゆかりのコレクションもあるのです。

なお、奥羽史料調査部は、1955年に東北文化研究室と名前をかえ、考古学や日本史に限らず、多様な分野から東北地方を研究する組織として活動を続けています。

中国関係資料

中国の大学から来られたお客様にお見せすると目を輝かされるのが、附属図書館の**北京風俗図譜**（8帙117枚）です。これは青木正児（中国文学）が、1925年に中国に渡った際に、画工・劉延年に描かせたものです。すでに失われてしまった北京の市井の風景や生活ぶりが、色彩ゆたかに、リアルに描かれています。

中国関係の資料はたくさんありますが、あと二つだけ紹介します。現在の宮城県丸森町出身で、戦前期に東京帝国大学教授として仏教を研究した**常盤大定**という人物がいます。常盤は、1920～29年の間に5回にわたり中国各地で仏教史蹟を中心とする調査を行いました。その際に作成した**石碑の拓本**を1949年に文学部が購入し、附属図書館に寄贈しました。一方、2016年になって、常盤が中国史蹟調査の際に撮影した写真約900点が文学部に寄贈されました。この写真は、フィルムが普及する前の**ガラス乾板**に写っているのが特徴です（フィルムも前代の遺物と化しつつありますね）。古いものは化学的な修復が必要となりますが、現在までに大半の復原が終わっています。今後はデジタル化を進

める予定です。拓本の元になった石碑にしても、撮影された史蹟にしても、すでに失われてしまったものがあり、大変貴重な学術資料となっています。

以上、紹介しましたように、人文学に関わる東北大学の数々のコレクションは法文学部・文学部を軸とする人々が織りなす縁によってもたらされたのでした。ところで、これらコレクションの多くは購入したものです。資金はどうやって調達されたのでしょうか。大学って、そんなにお金があるのでしょうか。いえいえそうではありません。実は大部分(特に戦前のもの)は、齋藤報恩会という財団法人の資金援助によって購入が可能となったのです(ただし、狩野文庫は宮城県出身の実業家で貴族院議員の荒井泰治の寄附による)。齋藤報恩会は、宮城県桃生郡前谷地(現在の石巻市)の地主齋藤家が設立した、研究助成を目的とした財団です(1923年設立—2015年解散)。東北大学の研究は、この財団の支えなしでは成り立たなかったといっても過言ではありません。

【付記】

- 1) この文章は、柳原敏昭「東北大学文学部の歴史と未来—学術コレクションを中心として—」(東北大学文学部編『人文社会科学の未来へ』(東北大学出版会, 2022年)の一部を改稿したものです。
- 2) 東北大学大学院文学研究科教員の次の方々からご教示を得ました。この場を借りて感謝申し上げます。

【資料紹介】

1. 東北大学附属図書館・狩野文庫

加保茶宗園編『柳巷名物誌』

現代日本学・教授 高橋 章則

金銭を介した男女の出会いの地であった遊郭「新吉原」は、他方では地方から江戸にやってきた文化人と江戸在住者との交流や文化活動の拠点でもありました。そればかりではなく、郭内の遊女たちが「個」の行為とりわけ文芸活動を充実させ、成果を発信する場でもありました。

そんな遊女達の文化発信の有り様を物語るのが狩野文庫蔵『柳巷名物誌』です。

「柳巷」とは新吉原の雅称。「名物誌」とは四季の景物や年中行事、風物などを盛り込んだ書物を意味します。本書は、天保5年(1834)1月に告知した31種の歌題(「兼題」)のもとに同年2月28日を期限として全国から寄せられた狂歌作品を「浅草庵春村」が「撰者」

となってまとめられました。後に国学者として知られる黒川春村はこの時期、「浅草庵」号を襲い「壺側」という全国組織を率いており、壺側に所属する作者を中心に全国から応募された作品は3月20日に開催された撰評の会を経て刊行に至りました。^{*}

この全国規模の一大行事を主催したのが新吉原の妓楼大文字屋の主人「文字楼本成」であり(図1)、本成は撰評の会当日に開かれた「依花待客」「籬女郎花」を歌題とした即興の歌合(「当座」)では撰者も務めていました。そして、同楼の遊女「一浜」と「浅茅生」はこの催し全体を「補助」する役目を担い、「一浜」は狂歌作品を寄せたばかりではなく挿絵も描き(図2)、「浅茅生」は十首の入撰を果たしました(図3)。ちなみに、浅茅生は翌天保6年刊行の狂歌集『紅叢紫籙』を編集し、同8年刊の『柳花集』では「撰者」を務めています。

近代になって「狂歌」人口は激減し、『柳巷名物誌』のような狂歌本の成立過程や狂歌の歌合の「撰者」・「補助」といった関係者の学芸活動の実態に目が向けられることがなくなってしまいました。彼らは毎月(「月次」)の作品評価会・学習会を主宰したり参加したりして、文芸を日常に取り込み、着実に「知」の集積を行っていたのです。その形跡は、狂歌集はもとより「兼題広告」や「甲乙録」(成績表)のような「摺物」を頼りに再現することが可能です。遊女達が妓名で作品集や狂歌関

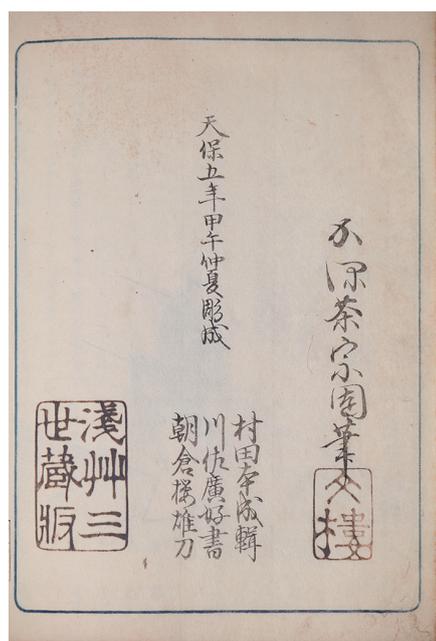


図1 『柳巷名物誌』の奥付



図2 一浜による「待客図」



図3 浅茅生による狂歌(右・中央上)

連資料に頻繁に登場するのを見ると、彼女たちが心身に厳しい現実の中で知的な自己研鑽の時間を確保していたことがわかります。

東北大学附属図書館狩野文庫は、北尾演政の挿絵で有名な『吉原傾城新美人合自筆鏡』(図4)のような遊



図4 北尾演政画『吉原傾城新美人合自筆鏡 前編』天明4年(1784)序

女関連の稀観本ばかりではなく、江戸時代の著名狂歌作者が所有した多くの「月次狂歌集」などを収蔵し、国内有数の狂歌本コレクションを形成しています。

※ 板本には現れない出版情報は筆者蔵の「柳巷名物誌 蜜画極彩色/序跋付厚表紙/袋入大本出来 全二冊」という「兼題広告」にもとづきます。(図5)

参考文献：

高橋章則「表現される遊女から表現する遊女」(『男と女の文化史』東北大学出版会, 2013年) 参照。

関連リンク：

東北大学 MOOC 東北大学で学ぶ高度教養シリーズ「男と女の文化史」

https://www.sal.tohoku.ac.jp/digital_museum/01.html

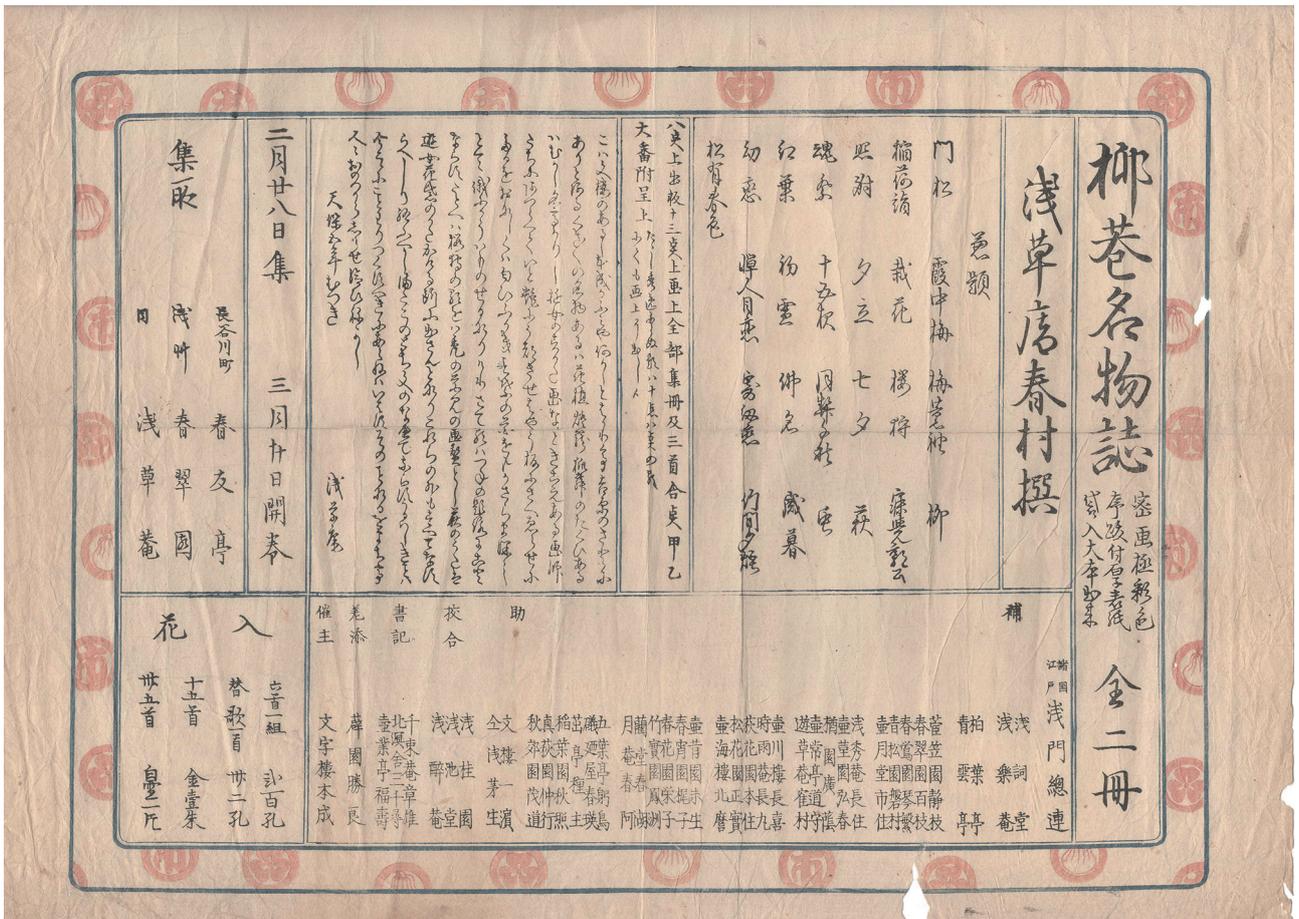


図5 『柳巷名物誌』の「兼題広告」

2. 東北大学附属図書館・国宝

司馬遷撰『史記』卷十 孝文本紀

日本語学・教授 大木 一夫

『史記』は、中国前漢の歴史家司馬遷しほせんの編纂による歴史書で、伝説上の天子黄帝より同時代の武帝までを描く通史として知られます。皇帝など個人の伝記を連ねて歴史を述べる形を中心に構成される紀伝体を取り、本紀12巻、表10巻、書8巻、世家30巻、列伝70巻の計130巻よりなるもので、中国史書史上、その後の正史の模範となるものです。

この『史記』の影響は日本でも大きく、奈良時代編纂の日本の正史『日本書紀』の範ともなり、平安時代以降には、『源氏物語』『枕草子』などの文学にも影響を与えたりするように、日本文化史における重要な書といえます。また、律令制度下の官僚の育成機関である大学寮では中国史を教える紀伝道きでんどうが生まれ、学問としても重視されるのですが、その紀伝道（文章博士）の大江家に伝わった『史記』の写本が、この孝文本紀こうぶんほんぎです（図1）。

この写本は、平安時代の延久5年（1073）、大江家国おおえのいえくにが書写したもので、本文は中国南朝の宋の裴駰はいいんによる注釈『史記集解』にもとづいています（図2）。東北大学蔵本は巻十孝文本紀の1巻、形態は卷子本（いわゆる巻物の形）で、縦28.5cm×横972.7cm、横50cm前後の料紙16紙を継いだものです。この写本の一連の巻（條

卷）で現存するものとしては、毛利報公会蔵（毛利博物館）の巻九呂后本紀りよほんぎ、大東急記念文庫蔵（五島美術館）の巻十一孝景本紀こうけいほんぎの各1巻があり、いずれも国宝に指定されています。これらは年代が明記された『史記』の最古の写本で、大江家相伝の証本として、紀伝道における大江家の学問を知る基礎資料となる貴重な書とされます。

このように本書は、日本文化史上の貴重書といえますが、同時に、漢文訓読という観点から、日本語の歴史を明らかにするためにも重要なものです。

日本において漢文の受容にあたっては、最初は外国語としての漢文（中国語）を外国語として読んでいたと思われませんが、長く漢文に触れることによって、漢字の読み方の一つとして訓が成立すると、それを利用して漢文訓読という翻訳システムが生まれました。それは漢文を日本語として読む（高等学校「国語」の漢文としておなじみの）方法です。これは、日本語の語順に合わないところは返読し、漢文の行間に読み方（傍訓）を書き入れ、また、てにをは（助詞類）をヲコト点という記号を付すことによって補うという方法です（図3・4）。そのような書き込み（これを加点とといいます）をおこなった資料を訓点資料と呼びますが、この孝文本紀は、まさにそれにあたるもので、延久5年以降3度にわたり加点されています（訓点資料は、寺院でも仏教の漢訳仏典等を訓読したため、仏教世界にもあります）。

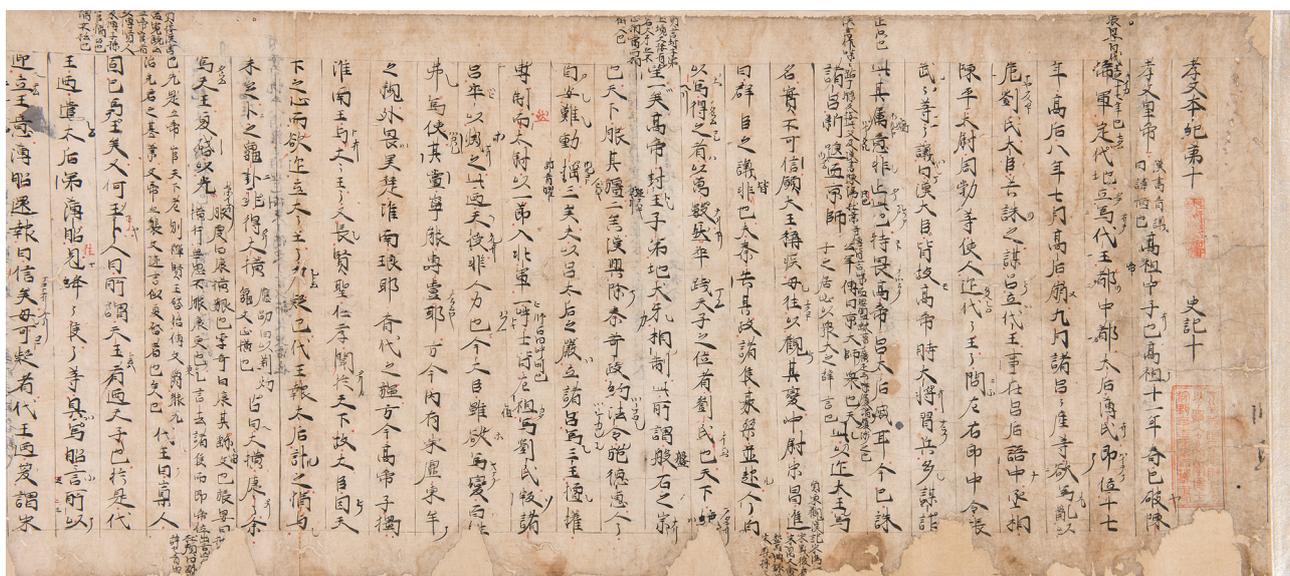


図1 司馬遷撰『史記』卷十 孝文本紀（巻頭）



図2 司馬遷撰『史記』卷十 孝文本紀 (奥付)

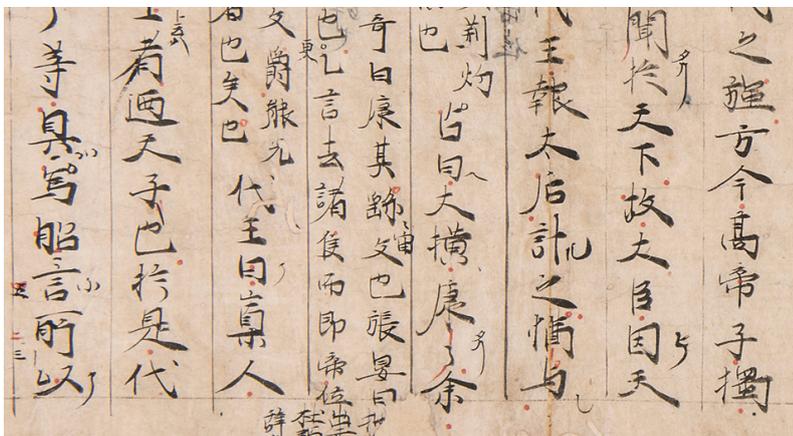


図3 漢字に付されたヲコト点

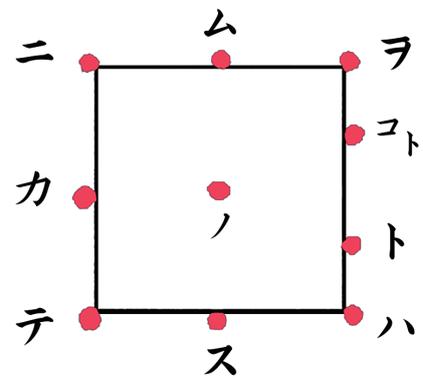


図4 ヲコト点図(朱点, 一部) 漢字の右上に朱点があれば「ヲ」、左上にあれば「ニ」を補って読む。

そして、この訓点資料が日本語の歴史を明らかにするのに役立ちます。日本語の歴史のための資料としては『源氏物語』なども有益なのですが、文芸作品は転写を重ねるのが常で、後代のことばの混入がないとはいえません。これに対して、訓点資料はそれが仏教の聖典であったり、博士家の家学の相伝のために書写・加点時の本がそのまま残っているので、その当時の語

や文字の形がそのままみられるのです。また、この漢文訓読から行間書き入れ用の文字としてカタカナが生まれてもいます(図5)。これらが日本語の歴史の資料となるわけです。そういう点で、この『史記』孝文本紀のような訓点資料は、日本語の歴史を考える際の重要な資料となっているのです。

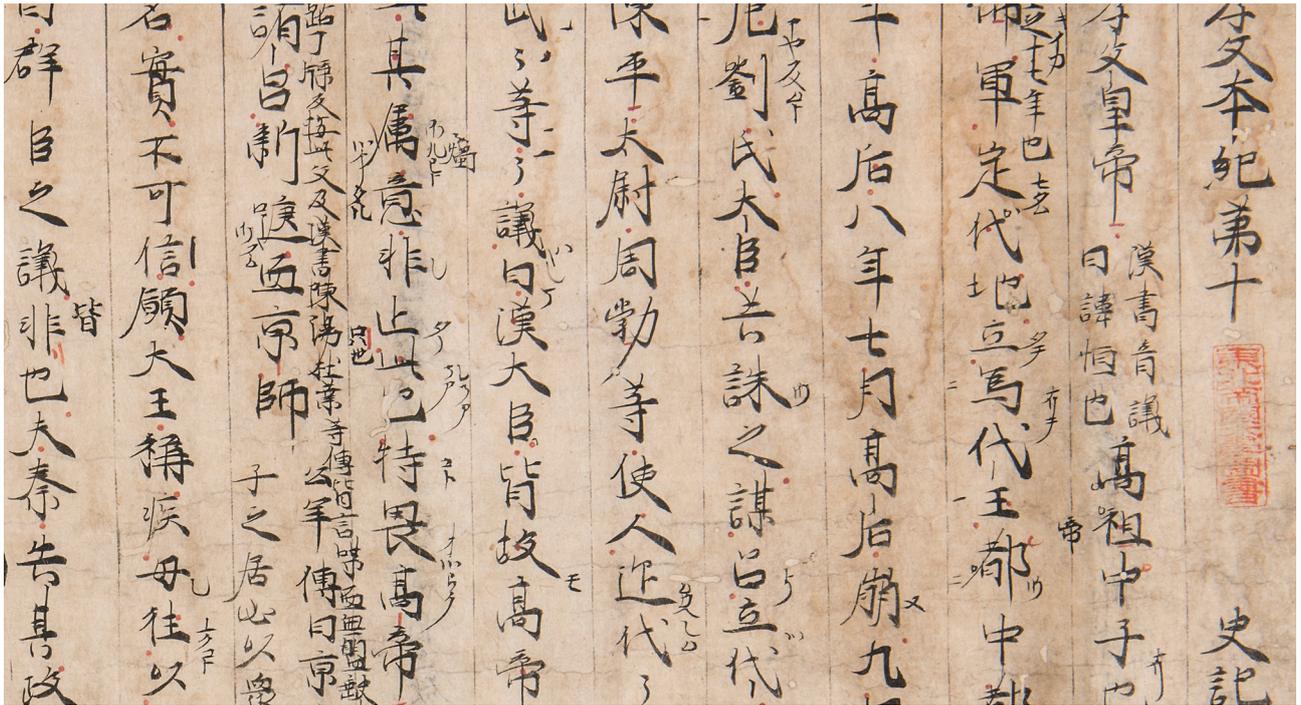


図5 カタカナによる行間の書き入れ

3. 東北大学附属図書館・漱石文庫

夏目漱石関連資料

日本文学・准教授 仁平 政人

東北大学附属図書館には、作家・夏目漱石（1867～1916）の旧蔵書と、自筆資料、遺品などが「漱石文庫」として収められています（図1）。元々これらの蔵書や資料は、東京・早稲田南町にあった漱石の旧宅（「漱石山房」）に保管されていたものですが（図2）、第二次世界大戦中に災禍を避けることが図られるなか、漱石の元弟子で本学附属図書館長であったドイツ文学者・小宮豊隆こみやとよたかの尽力により、東北大学に委譲されたものです。（ちなみに漱石山房はその後、1945年5月の空襲で焼失しています。）

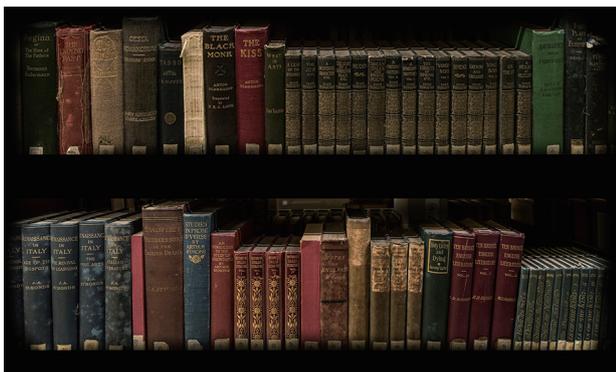


図1 東北大学附属図書館・漱石文庫の概観

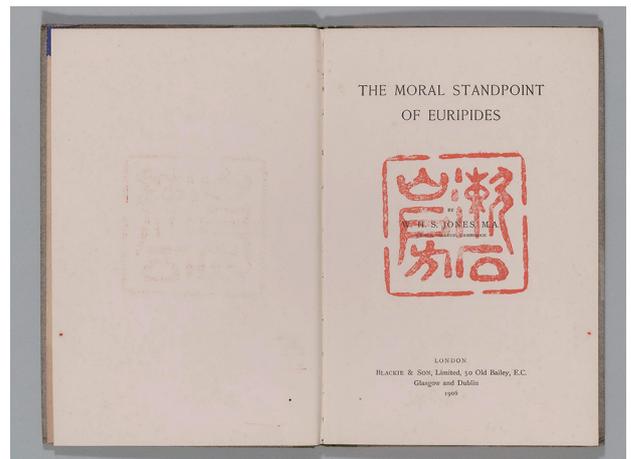


図2 漱石旧蔵図書館に捺された蔵書印（朱文方印「漱石山房」）

漱石文庫には、自筆資料として小説『吾輩は猫である』や『道草』などの原稿・草稿・メモ、イギリス留学時の日記をはじめとした日記・手帖・ノート類、また学生時代の答案・英作文など幅広い資料が収められています（図3）。それらが漱石の人物像や英文学者・作家としての活動を物語る、貴重で興味深いものであることは言うまでもないでしょう。ですが、漱石の文学を研究する上では、彼の蔵書もそれらに劣らず重要な意味を有しています。

漱石の蔵書は洋書約1650冊、和漢書約1200冊。その多くは当時入手しやすかった廉価本れんかほんやペーパーバック

ク、古本などで、本自体として貴重なもの（稀覯本など）はあまり含まれていません。しかし重要なのは、漱石がそれらの書籍を読み込み、随所に傍線や印を付け、また余白に膨大な量の感想・短評などを書き込んでい

ることです。すなわち漱石の蔵書には、学者・作家としての彼の思考や関心が刻み込まれているのです（図4）。

わかりやすい例として、ある一冊の書き込みに目を向けましょう。Henrik Ibsen “Little Eyoif”（ヘンリック・

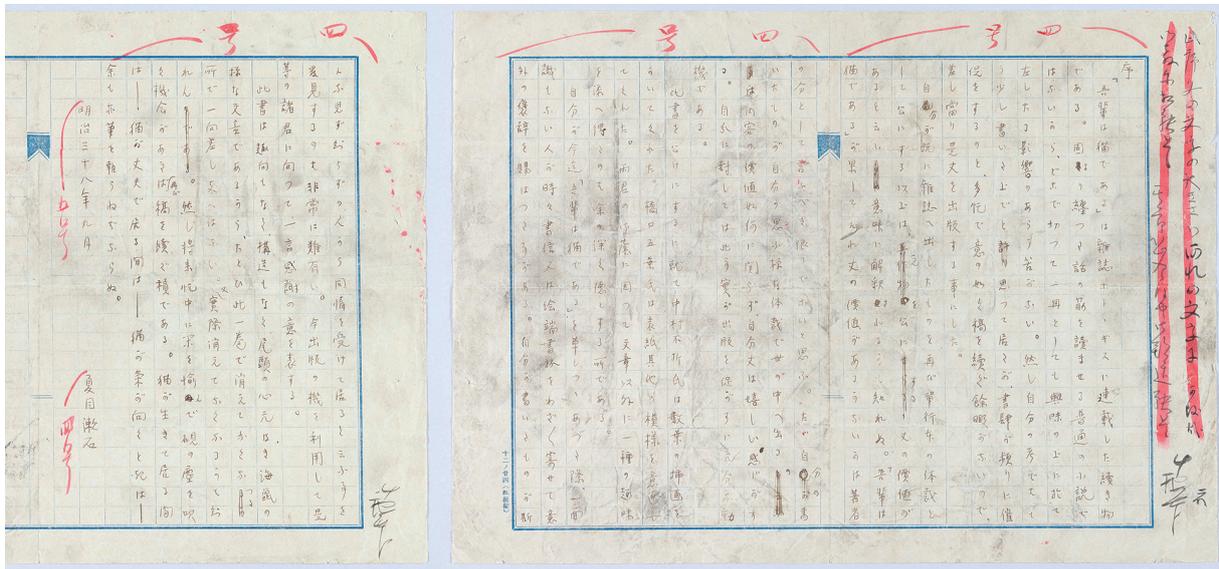


図3 原稿「吾輩は猫である」序文 1905年9月

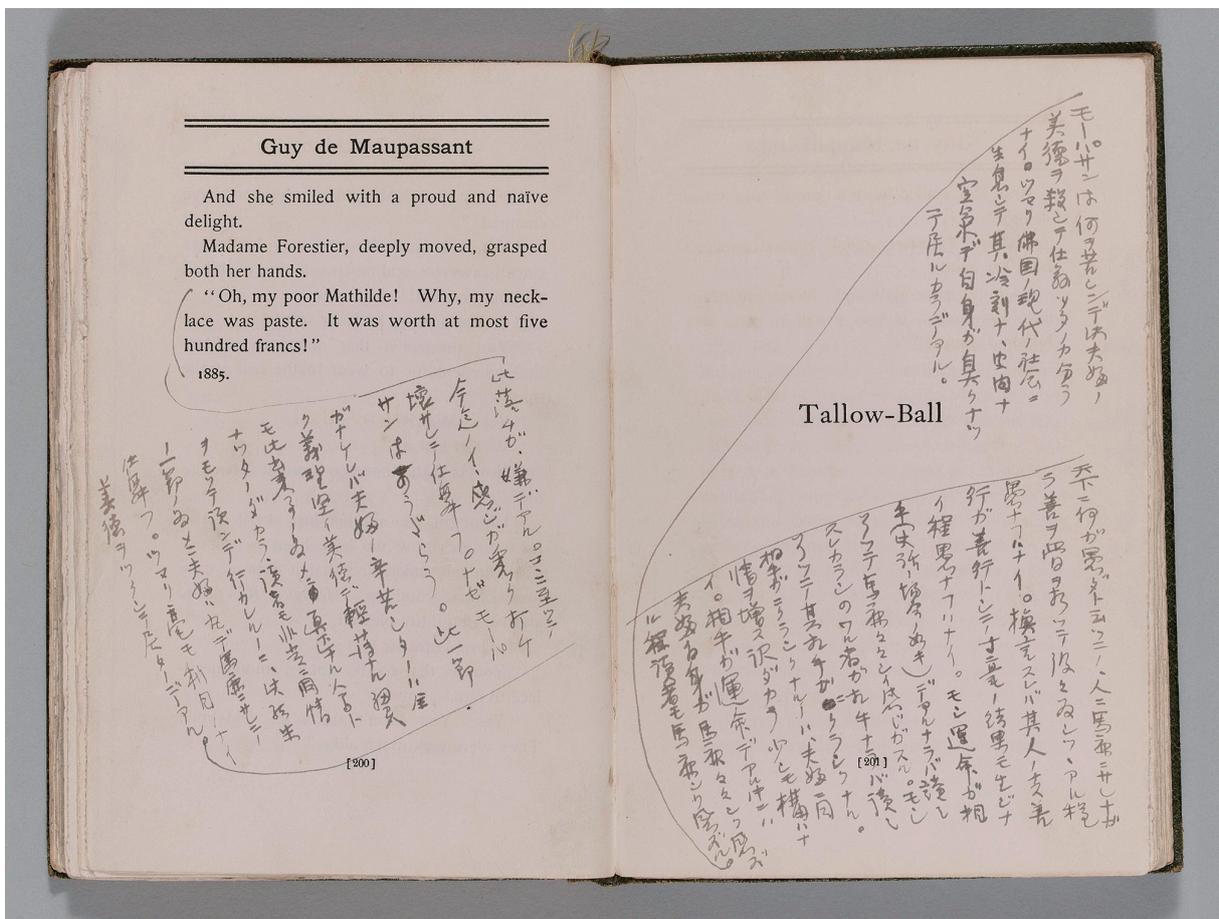


図4 Maupassant（モーパッサン）、Worksのうち Tallow-ball（首飾り）の書き込み

イブセン『小さなエイヨルフ』という書籍には、表紙を開いた見返しに次のように記されています——「アマリ面白カラズ。コレ丈ノ idea ガアレバモツトウマク書イテ見セル」(図5)。

ヘンリック・イブセンは近代劇の創始者と称されるノルウェーの劇作家・詩人であり、漱石文庫には『小さなエイヨルフ』のほか、代表作『人形の家』などイブセンの著作(英訳書)が計9冊収められています。漱石は『草枕』で「北歐の偉人イブセン」と呼ぶなどイブセンを高く評価するとともに、作家として強く意識し、繰り返し言及を行っていました。そのことを踏まえたとき、『小さなエイヨルフ』に対して「idea」を評

価しつつも「自分ならもっと上手く書いて見せる」と述べる書き入れは、漱石の作家としての自負と、またイブセンとは異なる表現上の志向を示唆しているとみられるのです。

漱石は小説の創作において、「^{ひと}他の書いた書物」と対話し、そこから「インスピレーション」を得ることを重視した作家でした(談話「人工の感興」(1907年)参照)。そうした意味で、漱石の蔵書は彼の文学の源泉であるとともに、その生成のプロセスの一端を現在に伝えていると言えるでしょう。そしてそれは、漱石の文学を新たに読み解く上でも、私たちに豊富な手がかりを与えてくれるのです。

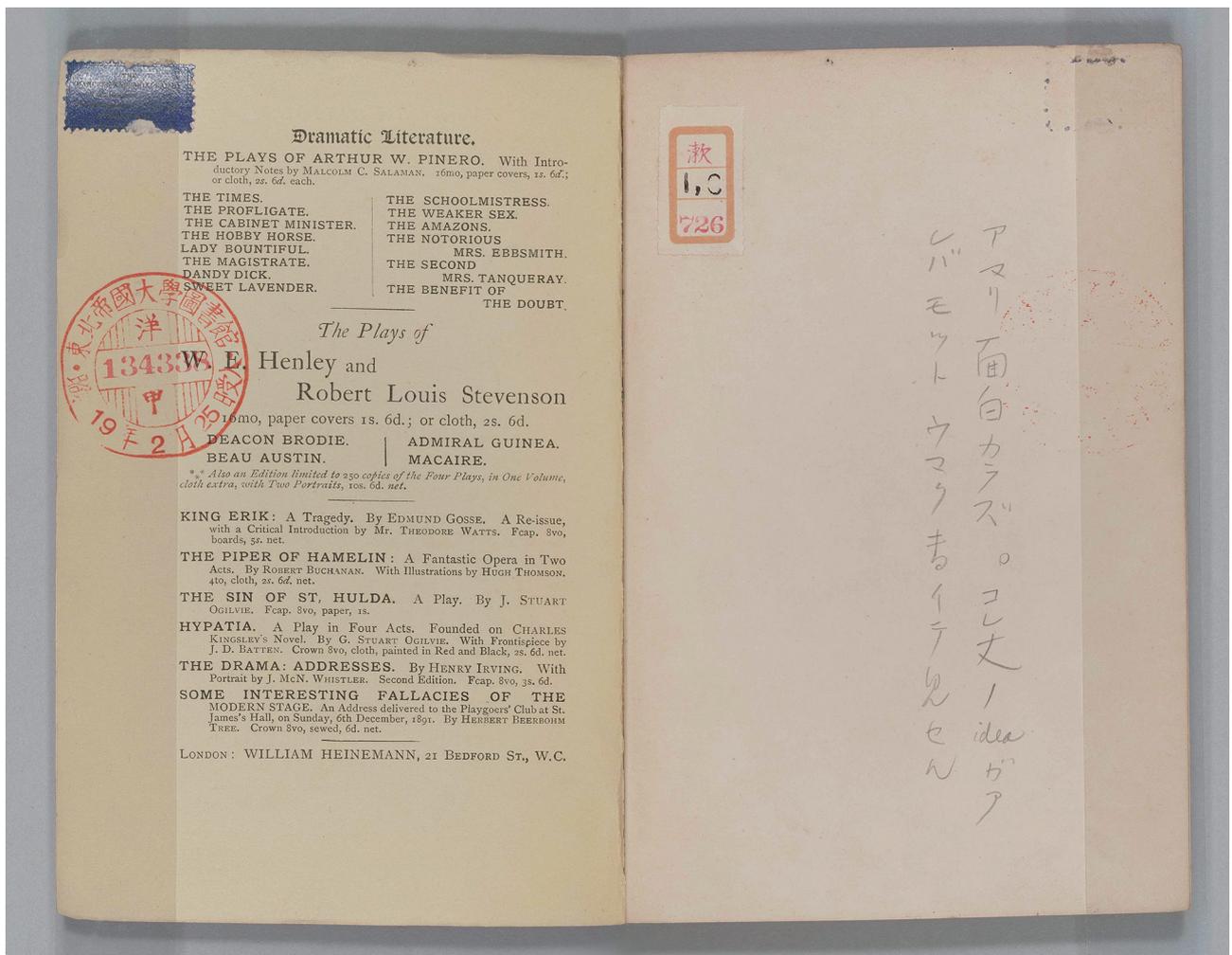


図5 Ibsen (イブセン), *Little Eyolf* (小さなエイヨルフ) の書き込み

4. 東北大学附属図書館・国宝

『類聚国史』巻二十五 帝王部第五

日本史・教授 堀 裕

『類聚国史』^{るいじゅうこくし}は、菅原道真が編纂した歴史書です。道真は、寛平5年(893)1月には、宇多天皇から編纂の命を受けていました。この書物の形式は、中国の会要、類書にならい、『日本書紀』から始まる6つの「国史」の記事を、内容毎に分類、つまり「類聚」したものです。その目的は、編年体で記された歴史書を簡便に調査することにあつたと考えられます。

東北大学が所蔵する『類聚国史』巻二十五は、神祇部に続く、帝王部の第五にあたります(図1・2)。帝王部の



図1 本資料を納めた塗箱

第一から第四は、歴代天皇の誕生や即位、死没・譲位などの記事があつたと考えられます。そのあとの第五は、前半の「太上天皇」^{だいじょうてんのう}の項目に、持統天皇以下11人のおもに譲位と死没に関する記事があり、後半の「追号天皇」の項目には、岡宮御宇天皇^{おかのみやにあめのみしたしろうしめしすめらみこと}(草壁皇子)以下4人が、没後に天皇号を与えられたことなどが記されています。

『類聚国史』は全部で200巻からなりますが、今は写本61巻と逸文が伝えられています。本巻は、加賀前田藩に伝えられ、現在は前田育徳会尊経閣文庫^{そんけいかくぶんこ}所蔵になる4つの巻とともに、平安時代の終わりから鎌倉時代に書写されたとされる古写本のひとつです。装丁は、卷子仕立てで、新表紙と、本紙33紙からなります。

本巻はもともと壬生家の所蔵でした。それは、旧表紙であつたとも推測される別紙の外題部分に、「類聚国史巻第廿五 壬生官務旧蔵」と記されていることなどが根拠となります(図3)。壬生家旧蔵本は、ほかにも尊経閣文庫所蔵の古写本(巻百七十一・巻百七十七など)が伝えられています。

尊経閣文庫には、江戸時代に作られた模本もあり、本巻の模本も含まれています。興味深いのは、巻十四の模本には、本巻と同じ「見了(花押)」の奥書と、それと同筆と見られる齧頭^{くわうとう}(本文上部)注記があることが、指摘されている点です(図4・5)。巻十四模本の元になった卷子は、伝えられていませんが、それは、本巻1巻

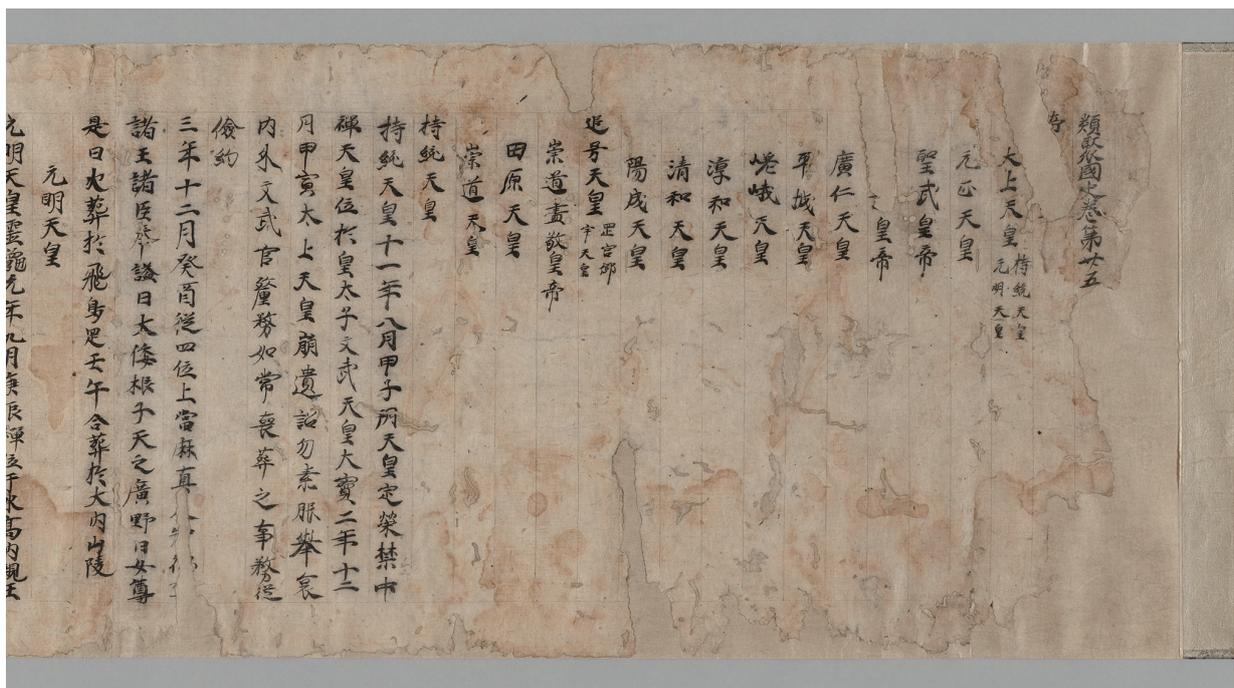


図2 『類聚国史』巻二十五 帝王部第五(巻頭)

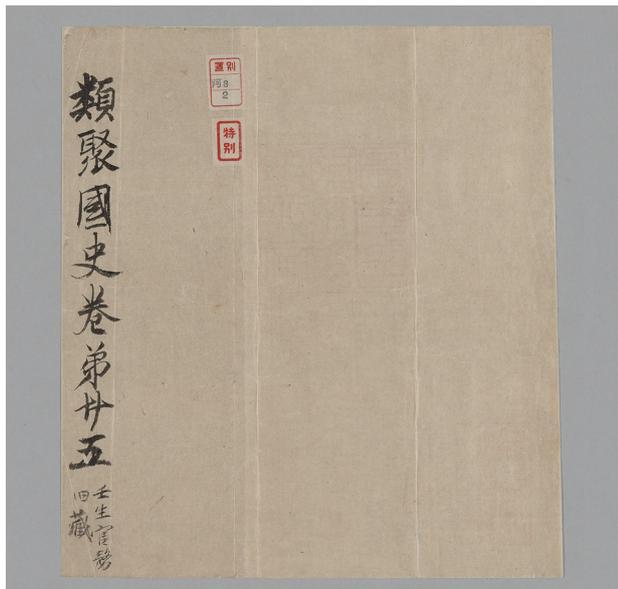


図3 旧表紙と推測される別紙の外題

のみが、東北大学所蔵になっていることとも関係すると推測されます。つまり、ある時点から、巻十四と巻二十五は、他の巻とは離れ、一緒に伝来していた可能性が考えられるのです。

本巻の文字を観察すると、比較的丁寧に写されている尊経閣文庫所蔵古写本などと比べると、趣がやや異なります。明らかな誤字・脱字のほか、異筆とみられるものも含め、本文の筆致は実に多様です。また、初めから朱の汚れが付いた紙を料紙として利用している点

にはやや驚かされます。本巻は、これを写すために用いた元の写本に問題があった可能性を差し引いても、内容への理解不足や、書写における慎重さが欠けるようです。尊経閣文庫所蔵古写本とは料紙の大きさが異なることも含め、他の壬生家旧蔵本とは、違う性格を持っている可能性が考えられるのです。

ところで、「^{みぶかんむけ}壬生官務家」とは、太政官の事務を担う^{べんかんしゅぎ}弁官首座（官務）を継承する^{おづきし}小槻氏を指します。官務小槻氏は、太政官に関わる公文書を管理しており、公卿等から諮問があった場合、記録を調査・回答する必要がありました。そのため、蔵人の必携書のひとつと記された『類聚国史』を所蔵していても不思議ではありません。また、東北大学には、延久5年（1073）に書写した『史記』巻十も所蔵されています。こちらは、^{きでんどう}紀伝道（文章道）の大江氏が書写し、代々加筆・校正、訓読をしていたことが分かります。ともに、家業に関わる書物を家が伝えてきたという点で、中世の宮廷文化を象徴する書物と言えます。両巻が、それぞれ家の手離れたのち、^{かのうこうきち}狩野亨吉氏の収集を経て、東北大学の所蔵に帰したということは、各時代における文書管理の歴史を象徴しているといってもよいでしょう。

なお、上記の内容には、遠藤みどり氏（お茶の水女子大学）との共同調査の成果の一部が含まれています。後日、氏による調査報告の公刊が予定されています。

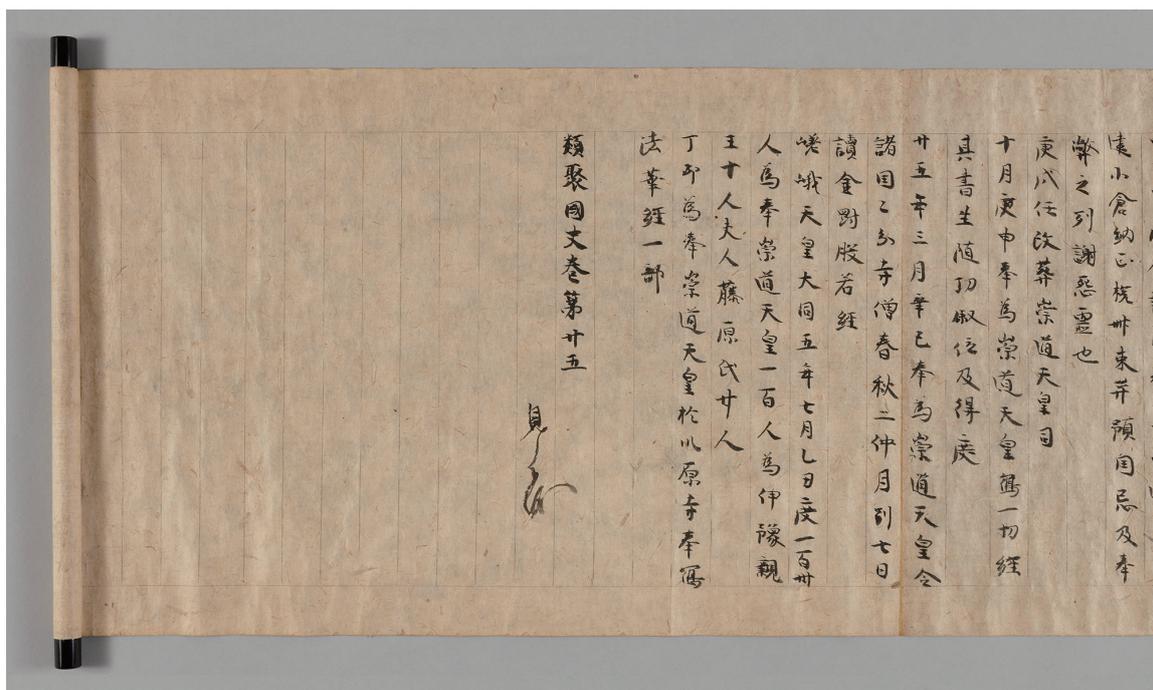


図4 末尾にみる「見了(花押)」

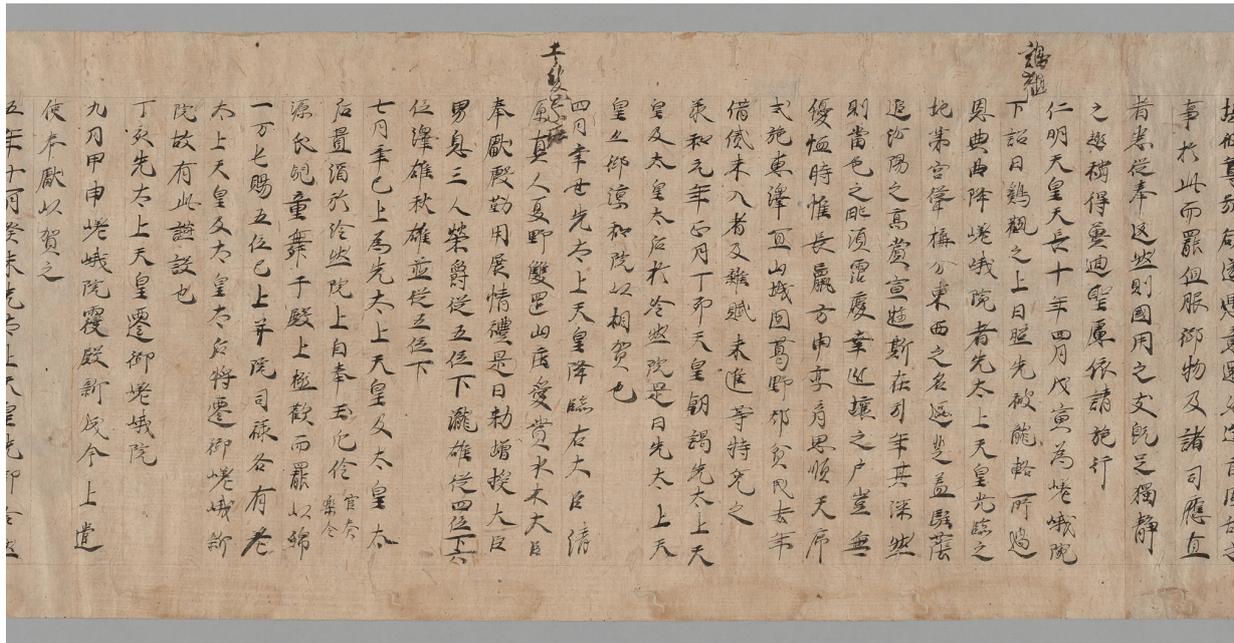


図5 龜頭(本文上部)の注記

5. 考古学管理資料

奥羽史料調査部関係資料

考古学・教授 鹿又喜隆

1925年(大正14), 法文学部国史研究室内に奥羽史料調査部が設置されました。喜田貞吉(講義担当: 日本古代史・考古学)が東北帝国大学の独自性を東北地方の歴史研究によって発揮すべきと考え、古田良一(講義担

当: 日本近世史), 中村善太郎(西洋史)と共に設立しました(図1)。彼らは、1925年(大正14)から1930年(昭和5)まで斎藤報恩会の助成を受け、東北地方に北海道と新潟を加えた東北日本の歴史・民俗資料を積極的に収集しました。そして、1929年(昭和4)に寄託された久原コレクションをはじめ、多くの考古学・歴史資料が確保されました。1930年代には、朴沢文書や鬼柳文書、秋田家史料などが収集され、中世・近世史料の充



図1 片平キャンパスの一室。中央には和装の喜田貞吉, その左が古田良一, 右が中村善太郎。

実が図られました。同じ頃、^{かわぐちえかい た だとうかん}河口慧海と多田等観が収集したチベット資料が、^{ういほくじゆ}宇井伯寿ら東北帝大のメンバーによって整理され、東北大学の貴重な学術的財産となりました。奥羽史料調査部は、1955年（昭和30）に文学部東北文化研究室として発展解消されましたが、地域研究に根差した伝統と学風は現在に受け継がれています。

東北大学片平キャンパスの中央、学都記念公園の片隅にひっそりと佇む赤煉瓦造りの建物があります（図2）。通称「赤煉瓦書庫」と呼ばれるこの建物は、旧制第二高等学校の書庫として1910年（明治43）頃に建設され、1925年（大正14）の同校の移転によって東北帝国大学に移管されました。そして、同年に設置された



図2 旧奥羽史料調査部の研究室：現在の文化財収蔵庫（登録文化財）

法文学部奥羽史料調査部の中核的施設として長く利用されることとなります。齋藤報恩会の補助を受けた共同研究「奥羽資料の調査研究」を発端に、国史研究室を事務局として発足したのが奥羽史料調査部です。ここでは、学部の垣根を越えた研究交流があり、さらに在野の研究者が出入りする学びの場であったと言われています。現在は文化財収蔵庫となり、重要文化財2件（477点）をはじめ、貴重な考古資料と民俗資料、奥羽史料調査部の活動を記録した乾板写真など、約20万点もの資料を収蔵しています。以下では、主にこの赤煉瓦書庫に残された乾板写真や古写真から、東北大学の研究と教育の歴史を読み解いていきたいと思ひます。

なお、この赤煉瓦書庫は、2017年に登録有形文化財に指定されました。この3階建ての重厚な建物を詳細に見ると、四面のデザインがそれぞれ異なっていることが分かります。また、上階に行くに従って煉瓦積みの隅柱が少しずつ細くなり、階ごとに窓枠の装飾が異なるなど、非常に凝った設計となっています。

赤煉瓦書庫には2件の重要文化財が展示・保管されています。そのうちの1件が経の塚古墳の埴輪4点です。経の塚古墳は、1910年（明治43）頃に遠藤源七と常盤雄五郎によって発掘され、^{かぶとがた いえがた}甲形埴輪や家形埴輪が見つかりました（図3）。1923年（大正12）には名取市下増田に伝染病舎を建設するために掘削され、^{ながもちがたせつかん}長持形石棺



図3 当時の経の塚古墳（宮城県名取市下増田）



図4 赤煉瓦書庫の隣に移設された石棺。工藤雅樹（左）と加藤孝（右）

が発見されました。その中には、人骨2体、鹿角製大刀2点、刀子2点、櫛などが副葬されていました。出土品のうち、甲形埴輪や家形埴輪など4点は1959年（昭和34）に重要文化財に指定され、遠藤源七から科研費によって購入し、1962年（昭和37）に東北大学に移譲されました。その後、経の塚古墳は完全に削平されましたが、赤煉瓦書庫の古写真の中にその姿が残されています。なお、経の塚古墳のあった場所は、今では道

路の下になっており、南側に塚が復元され、「経の塚古墳跡」とされています。もともと墳丘上にあった観音堂を移設する必要があり、すぐ脇に塚が造られたのかもしれませんが。また、経の塚古墳の長持形石棺は赤煉瓦書庫の隣に移設され、現在も丸森町台町古墳群1号墳の石棺と並んで佇んでいます。赤煉瓦書庫にあった別の写真には、石棺の前に先学の姿が写っています（図4・5）。

参考文献：

鹿又喜隆 2022 「第3章 近代・建築・教育の歴史資料
第1節 赤煉瓦書庫に残る法文学部の研究と教育の記憶」『学都仙台の近代 高等教育機関とその建築』
（野村俊一・加藤論・菅野智則編）pp.96-102 より

6. 考古学管理資料

文学部所蔵考古資料

考古学（総合学術博物館）・教授（文学研究科協力教員）
藤澤 敦



図5 赤煉瓦書庫の正面。伊東信雄（左）と加藤孝（右）

1925年（大正14）、東北帝国大学法文学部の専任講師であった喜田貞吉は、蝦夷研究のための調査旅行で青森県を訪れていました。この地は、江戸時代後期までアイヌの人々が住んでいたと認識されており、アイヌ文化の慣習や地名が残されています。その際に、三厩村

の村長の牧野逸蔵から、宇鉄小学校建設時に出土した宇鉄遺跡の出土品を寄贈されます。この資料が法文学部および奥羽史料調査部にとっての最初の考古資料となりました(図1)。中でも石刀や石冠など、異形の石器が注目されています(図2)。当時、喜田は他に類のない石刀を見て、その重要性を感じ、熱心にスケッチを取りました。その様子を見た三厩村長が資料の寄贈を申し出ました。その時の心境を、喜田は「全く予期以上の大収穫で、是だけで今回宇鉄へ来た労が酬みられて餘りがある」と述べています。後日、三厩村には東北帝大総長からの感謝状と寄贈資料の写真が送られています。これらは現在でも地元で大切に保管されています。

文学研究科が所蔵する重要文化財のひとつは、宮城県名取市の経の塚古墳の埴輪です(図3)。経の塚古墳は、1910年(明治43)頃に遠藤源七と常盤雄五郎によって発掘されました。出土品のうち、甲形埴輪や家形埴輪など4点が1959年(昭和34)に重要文化財に指定さ



図1 宇鉄遺跡(青森県東津軽郡旧三厩村, 現在の外ヶ浜町)出土の土器



図2 宇鉄遺跡(青森県東津軽郡旧三厩村, 現在の外ヶ浜町)出土の異形石器・石冠

れ、その後、遠藤源七から科研費で購入し、1962年(昭和37)に東北大学が所蔵することになりました。短甲形埴輪2点は、三角板を綴じた形式を表し、正面中央に装着の際の開閉部分が表現されています。家形埴輪は、奇棟造りの家を表しています。この古墳に葬られた人物は、5世紀の大和政権と繋がりがあった有力者であると考えられています。

もう一つの重要文化財は、石巻市沼津貝塚出土品です(図4・5)。沼津貝塚は1909年(明治42)～1932年(昭和7)まで毛利総七郎・遠藤源七によって継続的に発掘調査が行われました。一連の調査によって得られた膨大な資料が両氏によって長く愛蔵され、毛利邸内に建設された石巻考古館で一般公開されていたこともあり、国内で最も有名な縄文貝塚の一つに数えられるに至りました。学術資料に対する両氏の深慮から本学に一括で割愛され、科学研究費(機関研究)の交付を受けて購入され、1961年(昭和36)に東北大学が収蔵することになりました。したがって、文化財収蔵庫(旧赤煉瓦書庫)には、重要文化財以外の沼津貝塚の膨大な出土資料も一括保管されており、縄文研究の黎明期に基礎資料として活用されてきました。そのうち、骨角器を中心に473点が、1963年(昭和38)に重要文化財に指定されました。沼津貝塚は、1963年(昭和38)に東北大学文学部考古学研究室が、1967年(昭和42)に宮城県教育委員会が発掘調査を行いました。1972年(昭和47)には遺跡自体が史跡指定されます。この沼津貝塚の研究と、文化財としての資料保存が成し得たのは、毛利・遠藤両氏の長きにわたる尽力と、学術資料を散逸させないことに努めた深慮によるところが大きいです。

参考文献：

- 喜田貞吉 1930「大正乙丑宇鉄遊紀抄」『東北文化研究』第2巻5号 15-36頁
- 毛利総七郎・遠藤源七 1953『陸前沼津貝塚骨角器図録』三和興行印刷所
- 伊東信雄 1962-1964『沼津貝塚出土石器時代遺物 考古資料第1～3集』東北大学文学部東北文化研究室
- 伊東信雄 1968「宮城県牡鹿郡稲井町沼津貝塚」『日本考古学年報』16
- 藤沼邦彦 1972「石巻市沼津貝塚」『日本考古学年報』20
- 石巻市教育委員会 1976『沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書』石巻市教育委員会



図3 経の塚古墳（宮城県名取市下増田）出土の埴輪



図4 沼津貝塚（宮城県石巻市）出土の骨角器（環状垂飾）沼津貝塚（宮城県石巻市）出土の骨角器（環状垂飾）
写真提供：東北大学総合学術博物館 撮影：菊地美紀



図5 沼津貝塚（宮城県石巻市）出土の骨角器（離頭銛） 写真提供：東北大学総合学術博物館 撮影：菊地美紀

7. 東北大学附属図書館・貴重書

デルゲ版チベット大蔵経

インド学仏教史・准教授 西村 直子

日本に伝わった仏教が、紀元前5世紀頃のインドに端を発し、中国大陸、朝鮮半島を経たものであることを思い出してみましょう。遙か遠くから、長い時をかけて結実した多くの人々の「伝えよう」という努力を、私たちは見出すはずです。

仏教は、セイロン島、中央アジア、東南アジア、チベット、ネパール、モンゴルなどの諸地域にも伝わりました。そのルートは、大きく南伝と北伝とに分けられます。北伝の最重要資料の一つが、チベットの伝承です。7世紀に仏教が伝えられた後、8世紀後半頃から、サンスクリット語などインドの言語で伝えられた仏典の翻訳がチベット人僧侶によって始められました。チベットの文字や文法が整備されたのは、このためです。チベットで著された仏典にも、膨大な蓄積があります。これらチベット仏教の重要な資料が、東北大学図書館に所蔵されています。「デルゲ版チベット大蔵経」(図1・

2)、そして「チベット撰述仏典」です。

「チベット大蔵経」は、主にインド原典からチベット語に翻訳された仏教文献の総称です。ブッダの教えを伝える経典と教団の生活規定をまとめた律典とを収める「仏説部」と、経典解説や儀礼規定を教える論書を取める「論疏部」とから成ります。「デルゲ」は木版印刷の版木が作られた土地の名前で、現在の四川省北西部の徳格県に当たります。ブッダの教えは口承から書承へ、そして15世紀には印刷で伝えられるようになりました。

チベット大蔵経の主な版木は17-18世紀に複数の場所で作られました。デルゲ版の特徴は校訂の正確さと印刷の美しさにあります。本学所蔵のデルゲ版大蔵経は、20世紀初頭に日本人で最初の正式なチベット仏教僧となった多田等観^{た だ とう かん}先生が、ダライ・ラマ13世から贈られたものです。多田先生がチベット各地で収集した大量の「チベット撰述仏典(チベット人著作の仏典)」と共に、財団法人斎藤報恩会によって購入、本学に寄贈されました。多田先生は本学の教員として宇井伯寿^{う い ほう じゆ}、

すずきむねただ かなくらえんしょう

鈴木宗忠、金倉円照の諸先生と共に『西藏大蔵経総目録』

(東北帝国大学法文学部編)を1934年に出版します(図3)。全4,569部、デルゲ版の総目録としては学界初、チベットで翻訳された仏典の全貌が明らかにされました。

大蔵経目録に続き、チベット撰述仏典の目録作成が始まりました。しかし、穏やかならぬ時世を承けて作業は難航します。1953年、A catalogue of the Tohoku University collection of Tibetan works on Buddhism (西藏撰述仏典目録)(図4)の出版までに、多くの人々の献身がありました。国際的需要に応えるため、細分すれば4,000点も超えようかという各項に英文解説を付し、笹氣出版印刷株式会社の新たなチベット文字活字(図5)を使用した本目録は、チベットで大きく展開した仏教の姿を世界に初めて示すこととなりました。この業績により、金倉、多田、山田龍城、^{やまだりゅうじょう}羽田野伯猷^{はだのほくゆう}の諸先生に第

45回(1955年)日本学士院賞が授与されました。審査要旨には、「西藏撰述仏典の資料的価値は明かに認められ得るから、これを所蔵となすのは独り東北大学の誇であるのみならず、我国の学界一般の光栄である」と記されています。

関連リンク：

「東北大学デジタルコレクション」西藏大蔵経

デルゲ版 https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398tuldc_5100000003

東北大学まなび情報誌「まなぶひと」2019年9月号

<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/social/relation/04/relation0401/>

「笹氣出版印刷株式会社 笹っば活字館 活版印刷の道具たち 西藏撰述仏典目録」

<https://www.katsujikan.jp/collection/sonota/collection05.html>



図1 デルゲ版チベット大蔵経(部分拡大)



図2 上:カンギェルと呼ばれる仏説部 (ブッダの教えを説いたもの) 下:テンギェルと呼ばれる論疏部 (注釈)

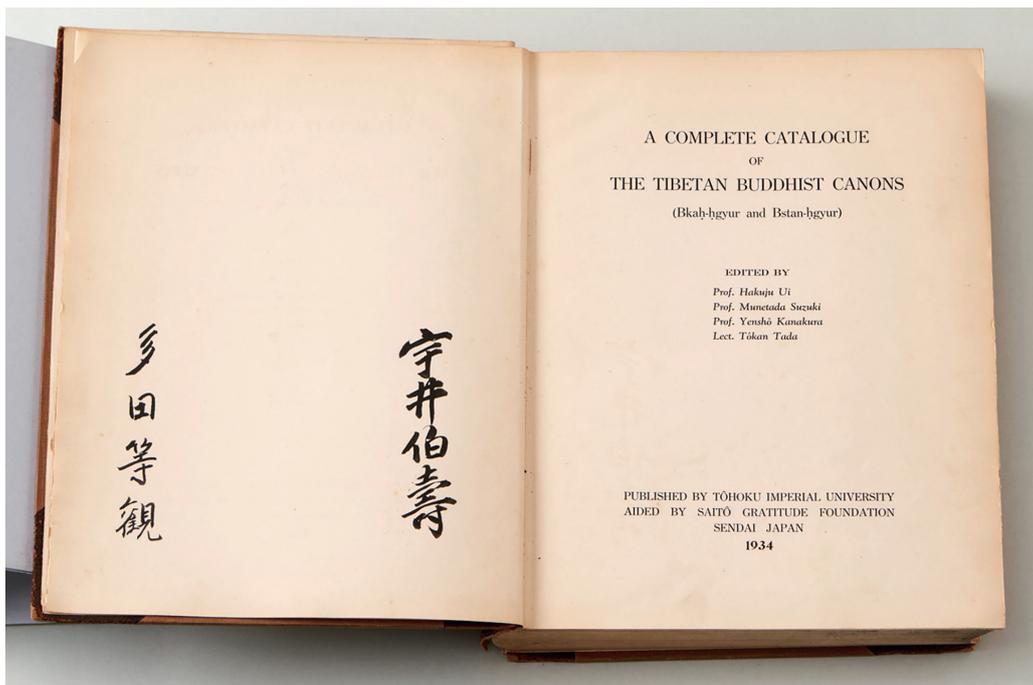


図3 東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵経総目録』（東北大学附属図書館所蔵本）にみる多田等観と宇井伯寿のサイン

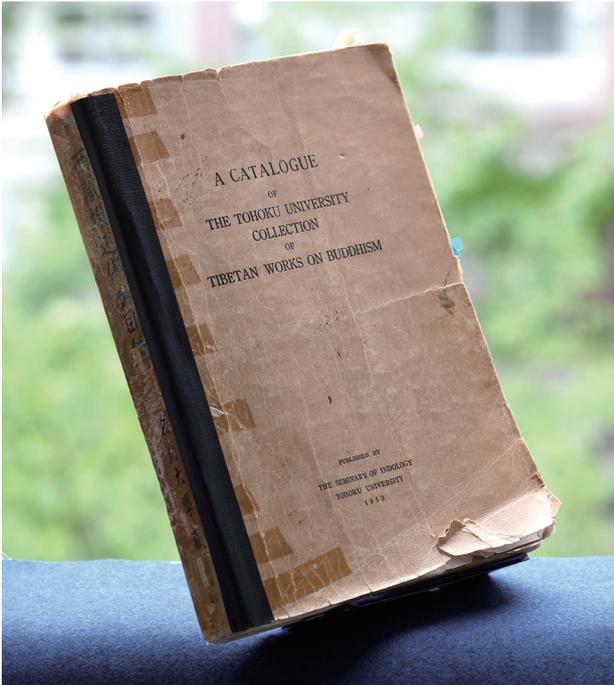


図4 A catalogue of the Tohoku University collection of Tibetan works on Buddhism (『西藏撰述仏典目録』1953年)

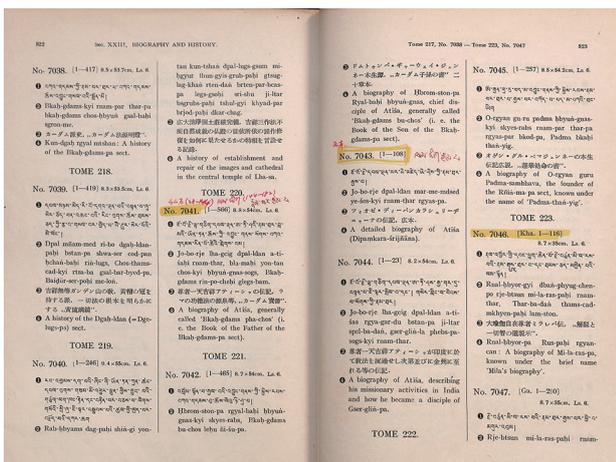


図5 チベット文字、チベット語のローマ字転写、日本語、英語の4つで表記された仏典名。インド学仏教史研究室の学生、教員が、補修したりメモを加えたりしながら代々使い続けてきた。

8. 東北大学附属図書館・貴重書

北京風俗図譜

中国語学中国文学教授 矢田 尚子

東北帝国大学法文学部支那学第二講座（現在の中国文学専修）の初代教授を務めた青木正児（1887～1964）は、助教授として着任した翌年の1925年3月から1926年7月にかけて、北京に留学しました。辛亥革命（1911）で清王朝が滅亡し、中華民国が誕生してから14,5年経った頃のことです。急速な近代化によって、古典文学を

理解する上で有用な資料となり得る王朝期の古い風俗が消滅しつつある状況を目の当たりにした青木は、風俗資料を蒐集しようとしたのですが、多額の費用がかかることから断念し、画工を雇い、風俗画として記録に留めることにしました。そうして完成したのが、彩色画117枚から成る「北京風俗図譜」です。写真ではなく風俗画にしたのは、色彩を記録するためもあるでしょうが、「写真は実観を得るも、物体の説明には不便」だからだと、支那学第一講座（現在の中国思想専修）教授の武内義雄（1886～1966）に宛てた手紙（図1）に書いています。

図譜は「歳時」「礼俗（婚礼と葬礼）」「居処」「服飾」「器用」「市井」「遊楽」「伎芸」の8部門に分かれています。

「歳時」の部には、正月（図2）や七夕、中秋節といった年中行事の様子を描いた図が収められています。そのうち「元宵灯市（正月の灯籠の市）」は、正月15日のげんしよせつ元宵節前後、町中が趣向を凝らした美しい灯籠で飾られるという伝統行事のはずですが、図では店先に数個の灯籠が飾られているのみです（図3）。青木が「今は大街を歩いて見ても大した人出も無ければ灯籠も無い…東四牌樓の大街を歩いて見ると老舗らしい乾菓子屋が両三家、店頭に絹張りの絵灯籠を十数個吊して名残の夢を物語っているのみである。…前門大街はすっかり電化されて了って、空しく東海の游子をして惘然たらしむるのみである」（「春聯から春灯まで」、「黒潮」1927年第3号）と帰国の翌年に書いていることから、まさにその「名残の夢」を記録した図であることがわかります。

「市井」の部には、店の看板や屋台、物売りの姿を描いた絵が収められます。文字を用いず、商品の形状や象徴で示した看板は「望子」または「幌子」と呼ばれ、特に中国北方で多く見られました（図4）。青木は後に「望子考」（『文化』1935年1巻3号）という論文を書いています。留学当時から特に興味を持って記録していたのでしょう。

「伎芸」の部には、京劇上演中の劇場内の様子、人形芝居や影絵芝居、大道芸などを描いたものがあります。京劇のさまざまな役柄の衣装や隈取りなどを記録した図からは、『支那近世戯曲史』（弘文堂書房1930年）で世界的に知られる青木の、演劇研究に対する熱意がうかがうことができます（図5）。

青木は、図譜に図説を付けて公表することを考えて

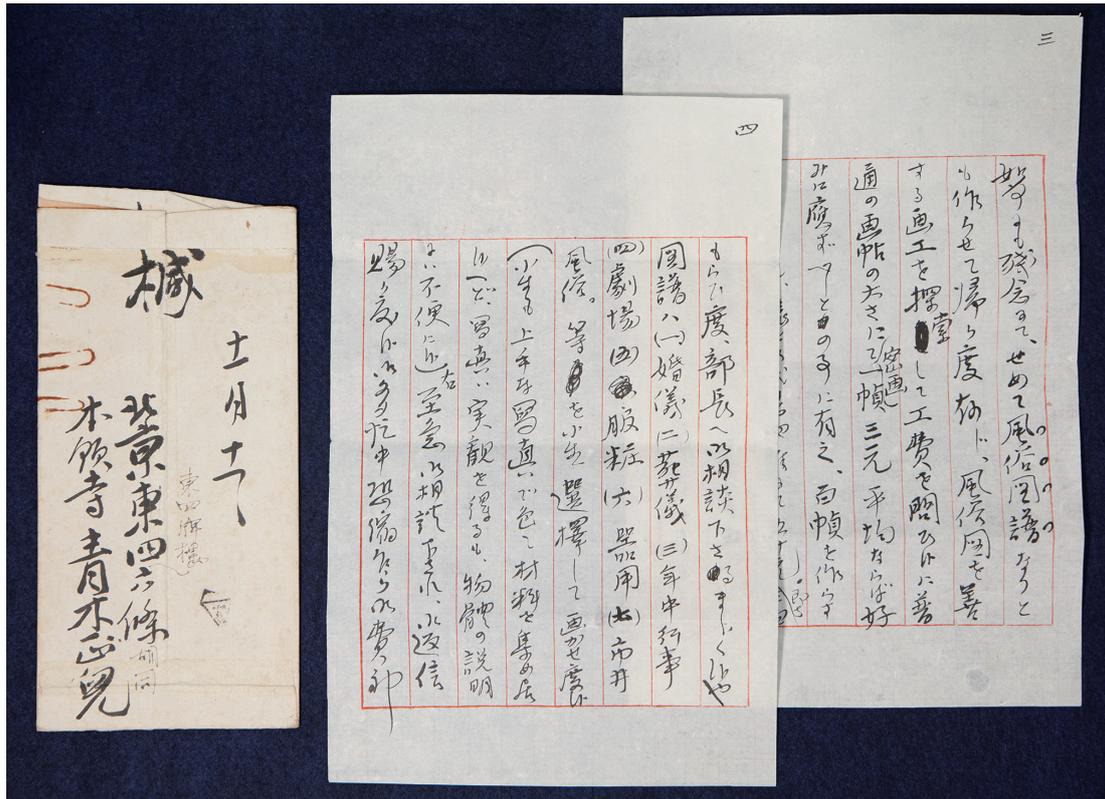


図1 武内義雄宛 青木正児書簡（東北大学史料館蔵）



図2 「歳時」部 正月の様子



図3 「歳時」部 元宵節（正月15日）の様子

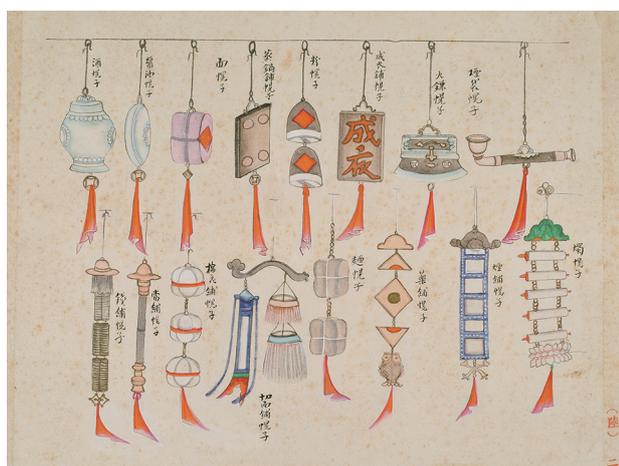


図4 「市井」部 望子(幌子)のいろいろ

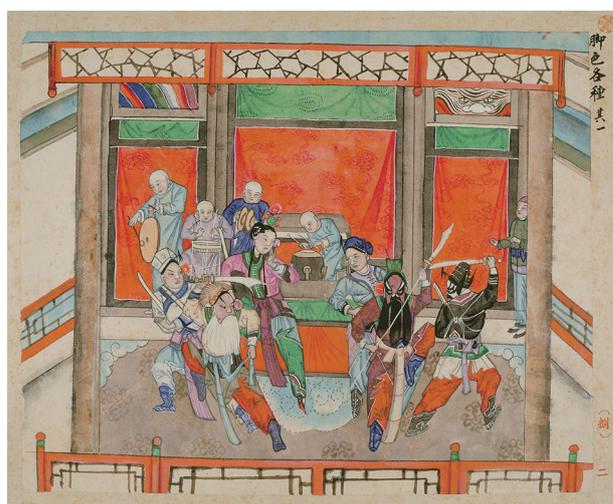


図5 「伎芸」部 上演中の京劇

いましたが、多忙のため叶いませんでした。長らく図書館に秘蔵されていた図譜が、広く知られるようになったのは、1950年に支那学第二講座に着任した内田道夫の功績によります。図のモノクロ写真に内田の解説文をつけた『北京風俗図譜』が1964年に平凡社東洋文庫

に取められ、1986年にはカラー版が平凡社から出版されました。2018年には張小鋼訳注の中国語版も中国の東方出版社から出ています。いずれも東北大学附属図書館に所蔵されており、図譜の内容をすべて見ることができます。

9. 東北大学附属図書館，文学部

常盤大定関連資料

中国思想中国哲学・教授 齋藤 智寛

宮城県丸森町の浄土真宗順忍寺に生まれ，東京帝国大学教授を経て仙^{どうにんじ}台道仁寺の住職として一生を終えた仏教学者・常盤大定（1870-1945）は，大正時代から昭和初期にかけて5度にわたる中国史蹟調査を敢行しました。この調査の際に作成された碑文や石窟の拓本は，常盤の没後に東北大学文学部によって購入され，「中国金石文拓本集」225軸として今も附属図書館に収蔵されていますが，ここでは，そのうち2点を紹介します。

「京兆房山西域寺大殿前仏幢外九種」は（図1），大正9年（1920），石経で名高い北京郊外の房山西域寺（雲居寺）で採拓された資料です。この調査には後に本学法文学部の支那学第一講座（現中国思想専修）教授となる武内義雄（当時は懐徳堂講師）が同道していたことが，武内の「訪古碑記」（『武内義雄全集』10）に記されています。なお常盤は同じ旅行で南京の古蹟を調査した折には，後に本学法文学部史学第二講座（現東洋史専修）教授となる岡崎文夫と会見しています（常盤『古賢の跡へ』）。

「山西竜山道教石窟拓」は，道教の一派・全真教の道士が元代（13世紀）に開鑿した石窟の壁面に刻まれた願文（図2）。この調査の成果は後に，常盤の名著『支那に於ける仏教と儒教道教』に取り入れられます。彼は，武内義雄とともに儒教・道教・仏教の三教交渉史という研究分野の開拓者でもありました。

以下3点は，2016年に道仁寺より文学研究科に寄贈された常盤大定関連資料です。まず，同定を終えたものだけで480枚，全体で約900枚ほどあるガラス乾板から，大正9年の雲崗石窟を写した1枚（図3）。常盤は史蹟調査において拓本を採るのみならず，仏像や寺院建築などの写真も多数撮影していました。その成果は，建築学者・関野貞^{せきのただす}との共編になる写真集『支那文化史蹟』全12巻に結実しますが，文学部所蔵のガラス乾板コレクションはその原板と見られるもの，及び写真集では未使用だった写真を含み，それぞれに大きな意味のある資料です。なお偶然ですが，昭和14年（1939）に雲崗を再訪した常盤は，後に本学東洋史講座教授となる愛宕松男^{おたがまつお}と会っています（長廣敏雄『雲崗日記』）。

自筆原稿「道教ノ歴史」は（図4），短冊や小さな紙

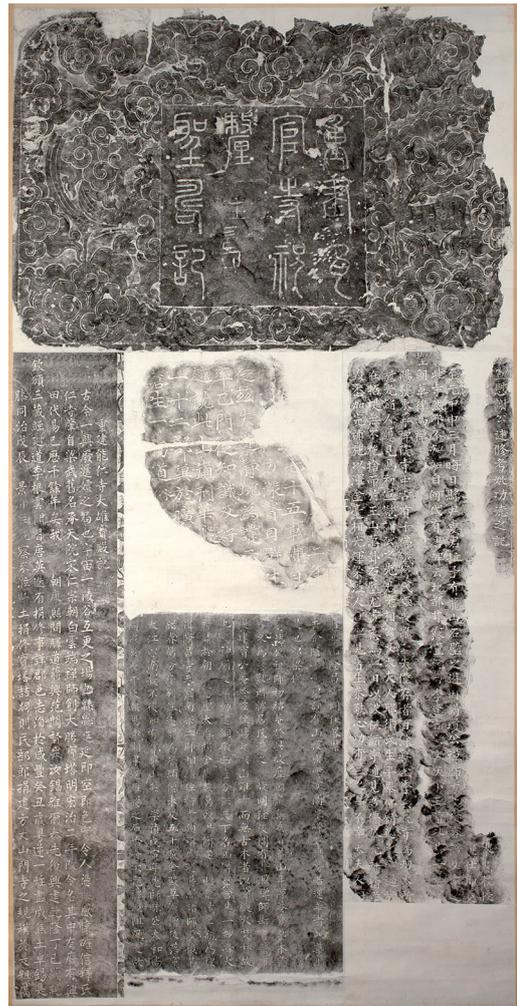


図1 北京房山西域寺の諸拓本



図2 山西竜山道教石窟の拓本

片の挿入も含み数え方が難しいのですが、190枚ほどの罫線紙をこよりで綴じたノートの最初の一枚。前述の『支那に於ける仏教と儒教道教』にほぼ同文を見出し得ますが、おびただしい推敲を経て成稿に至る執筆スタイルがうかがえます。

「^{えんえい}釈門瑛書簡」は、常盤が卷子仕立てに表装していた書簡群の一つで、満州事変前夜の中華民国20年(1931)

8月5日、中国の僧円瑛(1878-1953)が常盤に当てた書信です(図5)。内容は日本で出版された『大正新脩大藏経』の入手に関わることのようにですが、文中には、日本の大陸政策を支持し旧満州でも活動した曹洞宗僧侶・^{みずのほいぎょう}水野梅暁の名も見えます。僧侶としての常盤大定は、本人の主観としては親善のためとは言え、その活動がしばしば日本の中国侵略に加担する結果ともなりました。このことは、近年検証が始まったばかりの課題です。



図3 雲崗第十窟前室東南面の写真ガラス乾板(1920年当時)

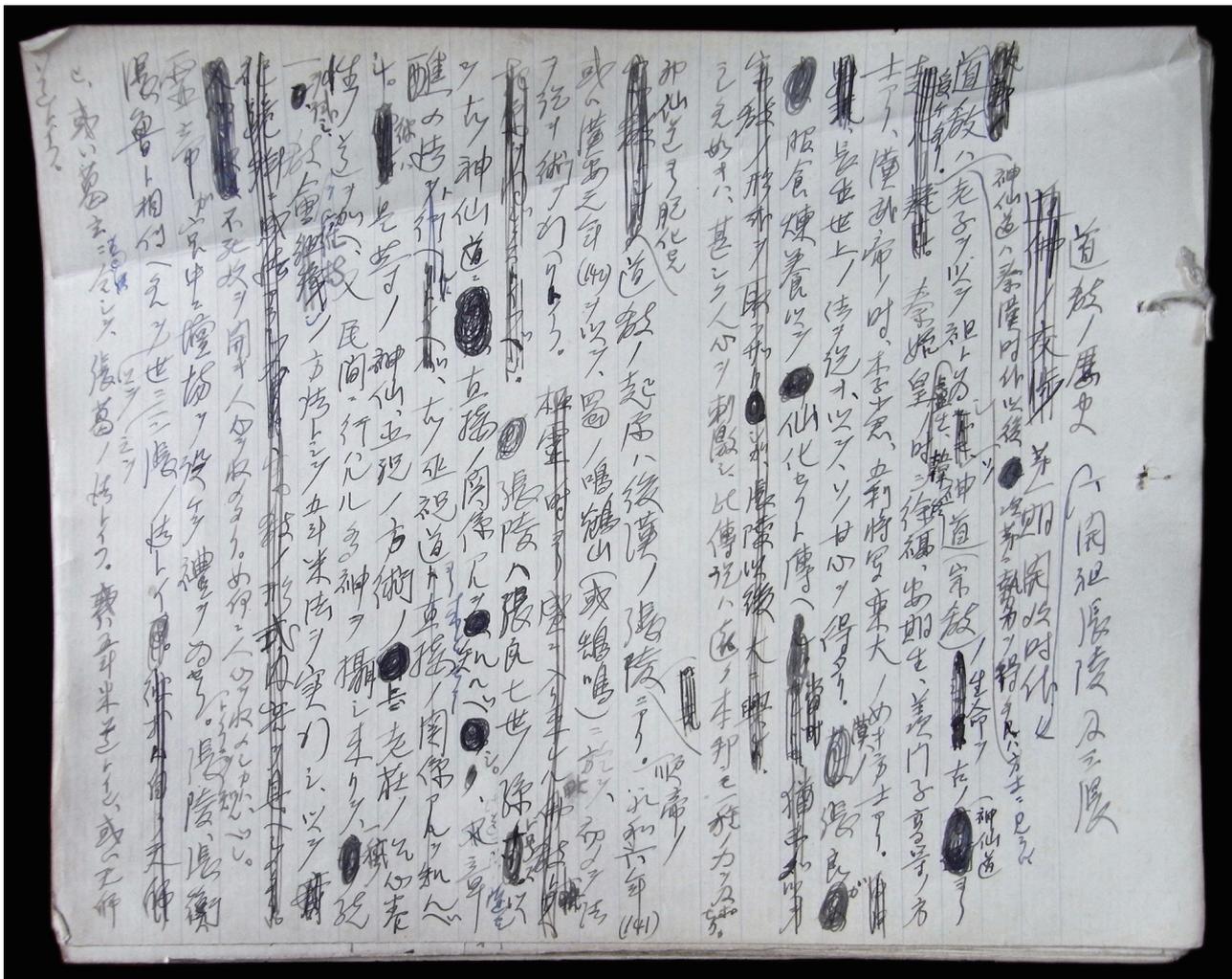


図4 常盤大定自筆原稿「道教ノ歴史」

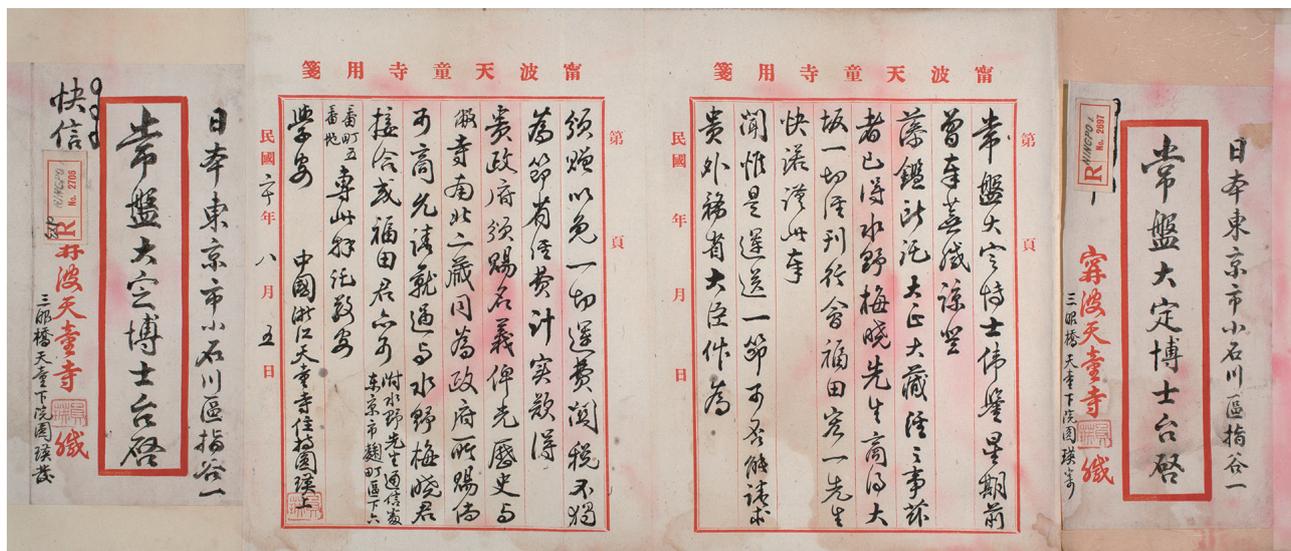


図5 常盤大定宛 積円英書簡

10. 東洋・日本美術史管理資料

河口慧海請来 チベット資料

東洋・日本美術史・教授 長岡 龍作

東北大学には、明治時代に単身チベットに入った河口^{かわぐちえいかい}慧海が請来した資料が収蔵されています。慧海は、15歳の時に読んだ『釈迦一代記』に心を打たれ発心し、後に^{おうぼくしゅう}黄檗宗の僧侶となります。慧海がチベットを目指したのは、日本にある漢訳仏典では釈迦の正しい教えを知ることはできないと考えたからです。そこで、梵語・チベット語仏典を求めるネパール・チベットへの旅を決意し実行しました。

明治30年(1897)、慧海は、インド・ネパールを経てチベットを目指しました。当時のチベットは厳重な鎖国状態にありましたので、慧海は日本人であることを隠しチベットに潜入しました。医学の心得があった慧海は、ラサ郊外のセラ寺で医者として名声を得ていましたが、1902年5月、日本人であることが発覚し、辛くもチベットから脱出しました。

帰国後の1903年11月、慧海は東京美術学校で請来品の展覧会を開きました。『河口慧海師将来西藏品図録』(1904)はその図録です。また、この旅行の経験を1904年に『チベット旅行記』として出版します。さら

に1909年には、その英語版"Three years in Tibet"を出版し、探検家としての名を一躍世界に知らしめました。

最初のチベット旅行では目的の仏典を入手することができなかつたため、1904年、慧海は再びチベットを目指し日本を発ちます。けれどもチベット入国が叶うのは、10年後の1914年です。この旅で、慧海はついに2種のチベット語大蔵経を手に入れました。

木造菩薩立像は、銘文からネパールカトマンドウのボードナート大塔で得たものであることがわかります(図1)。この菩薩像は『図録』に載っています(図2)。一方、木造光背には、明治38年(1905)にボードナート大塔で得たとする銘文があり(図3)、さらに四体の菩薩像がコレクションにはあります(図4)。これらは2回目の請来品です。2度の旅行にわたって入手されたことを見ると、慧海はこれらの菩薩像に深い思いを懐いていたことが窺われます。

銀製釈迦如来坐像には、ボードナート大塔下の^{ハルシヤラージヤ}「波留俱羅都」が造ったと記す刻銘があります(図5)。この釈迦如来像は銀製文殊菩薩騎獅像ともに、『図録』に載っています(図6)。『チベット旅行記』には、1903年1月から3月頃、カルカッタの在留日本人から寄付された資金をもとに、銀の仏像3台とそれを納める厨子1



図1 木造菩薩立像(右は足ほぞの銘文)



図2 東京美術学校校友会編『河口慧海師将来西藏品図録』
(画報社 1904年)

個をネパールで拵えたとあり、この2像がそのうちの2
体に相当します。これらは、『旅行記』に登場する第1
回目の数少ない請来品として貴重です。

東北大学のチベット資料は、慧海請来の大藏経以外
の造形資料よりなっています。その大部分は、第2回

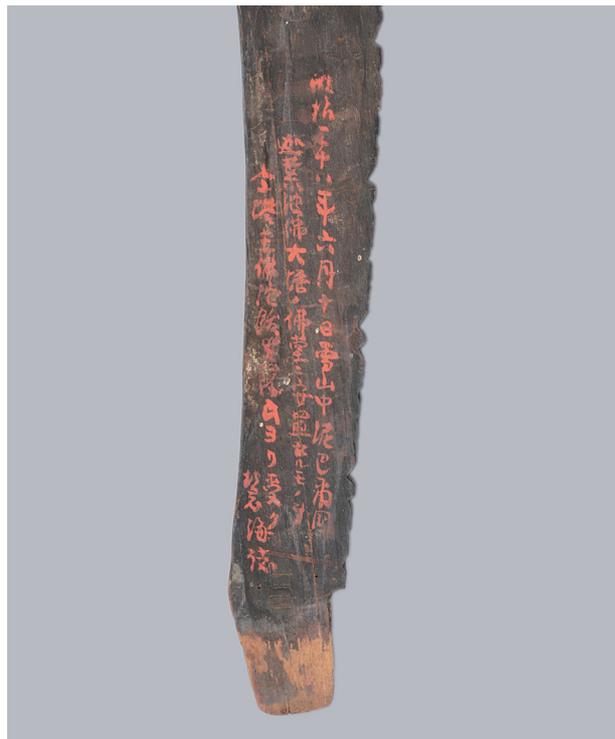


図3 木造菩薩立像 光背裏面

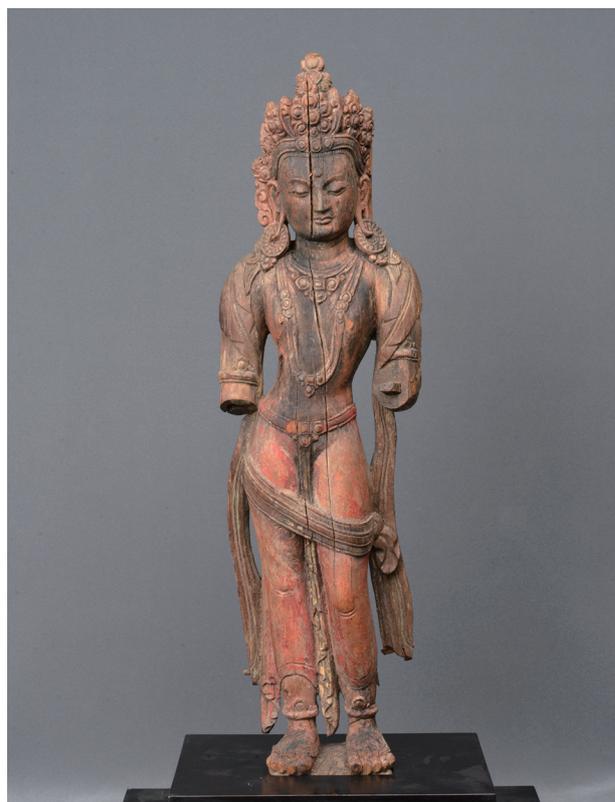


図4 木造菩薩立像

目の旅行で収集されたものですが、第1回目の請来品
もわずかに含まれています。これらの資料の重要性は、



図5 銀製釈迦如来坐像（右は底板の刻銘）



図6 『河口慧海師将来西藏品図録』（右は現在の銀製文殊菩薩騎獅像）

河口慧海という人物の傑出した個性を現物を通して伝える点にあると思います。河口慧海は、現代の日本人が失った信仰心と知力、そして実行力を持って生きた

人物です。これらの品々はその人生の証しという意味も持っているのです。

11. 東北大学附属図書館・秋田家史料

三春藩歴代藩主肖像画

東洋・日本美術史・准教授 杉本 欣久

東北大学附属図書館には出羽の戦国大名・安東愛季^{ちかすえ} (1539～87)，その曾孫にあたる三春藩の2代藩主・秋田盛季^{もりすえ} (1620～76) から10代肥季^{ともすえ} (1813～65) に至る計10人の肖像画が伝わります。安東愛季は平安中期の武将・安倍貞任^{あべのさだとう} (1019?～62) の子孫にあたり，秋田県北部から青森全域，北海道南部を勢力圏としました。その子・実季^{まねすえ} (1576～1659) の代には居城を檜山 (能代市) から湊 (秋田市土崎) へと移し，秋田氏を名乗りました。豊臣秀吉の伏見城築城や朝鮮出兵などで活躍をみたものの，関ヶ原の戦いでは東軍につき，慶長7年 (1602) に佐竹氏と入れ替えに常陸国宍戸 (茨城県友

部町)，さらに跡目を継いだ嫡男・俊季^{としすえ} (1598～1649) の正保2年 (1645) には，福島県田村郡三春町を中心とする三春藩に転封され，幕末に至るまで秋田氏が5万石の所領を統治することとなります。

この三春藩に伝来した文書や蔵品が，東北帝国大学国史研究室の講師であった歴史学者・喜田貞吉^{きたさだきち} (1871～1939) の尽力により，昭和14年 (1939) に秋田家から寄託され，昭和30年代に約4,300点が正式に附属図書館の所蔵となりました。

「衣冠束帯」の正装姿であらわされた歴代藩主の肖像画は1人につき1点ですが，3代秋田輝季^{てるすえ} (1649～1720) のみ大幅 (111.0×56.0cm) と小幅 (51.5×30.3cm) の2点が伝わります (図1・2)。輝季は「三春駒」として知られる献上馬の品種改良を行うなど，藩財政にテコ入れを行った藩主として名を残しました。ともに



図1 狩野探船章信「秋田輝季肖像」(3代藩主・1649～1720) 左・大幅 右・小幅



図2 顔の部分拡大

垂纓の冠を戴き、位階の五位をあらわす緋色の袍と黒の下襲を着け、笏を執って高麗緑の上置に座す姿に描かれます。太刀を帯びるための切平緒には「檜扇に違い鷲羽」紋があしらわれます。この紋は、鎌倉時代の安東家当主・貞秀が後鳥羽上皇に召された際、朝鮮から送られた鷲の羽2枚を檜扇に載せて拝領したのに因んだもので、同じ紋が大幅の金具にも認められます(図3)。大幅には「孝子 秋田頼季奉祀」の記および裏面に

「法名号 乾元院殿剛山瑞陽大居士」の墨書があり、重臣・荒木高村の長男でありながら4代藩主を継いだ秋田頼季(1696～1743)が、先代の菩提を弔うために発願したとわかります。ただし、小幅上部の三行書も同じ書体であることから、2点は同時期の制作とみて良いでしょう。小幅の軸先には珍しく水晶が用いられ、現在でも三春北部の鹿島大神宮(郡山市西田町)にベグマタイトの岩脈が露頭しているように、領内で産出された水晶の可能性が考えられます。

この2点を手がけたのは、著名な幕府の御用絵師・狩野探幽の孫にあたり、その鍛冶橋狩野家3代を継いだ狩野探船章信(1685～1728)です(図4)。追善目的という肖像画の性格から、輝季が没した享保5年から間もない探船36歳頃の制作とみられます。宝永6年(1709)には京都御所の障壁画を描いたほどですが、わずか44歳で亡くなったため、希少性の高い作品と位置づけられます。

一方、29歳で早逝した6代秋田定季(1726～57)の肖像画は、その澁刺とした若い相貌をとどめる佳品



図3 秋田家の家紋「檜扇に違い鷲羽」

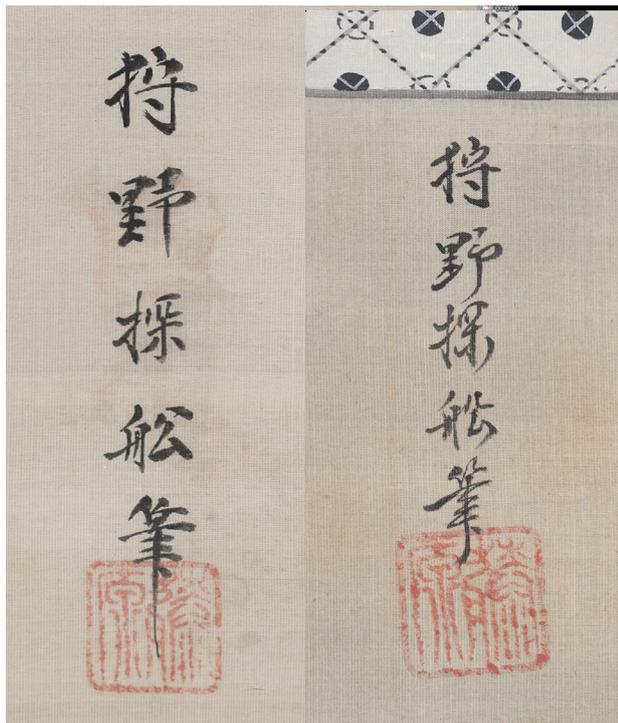


図4 鍛冶橋狩野家3代・狩野探船章信(1685～1728)の落款

です(図5)。7代千季(倩季・1751～1813)によって発願され、幕府御用絵師の中橋狩野家11代を継いだ狩野祐清英信(1717～63)が手がけました。狩野派宗家に生まれた英信も47歳と短命でしたが、8代吉宗(1684～1751)と9代家重(1711～61)という将軍2代の遺影を手がける榮譽に預かりました。本図は「法眼大藏卿祐清拜画」との署名から制作年代が限定され、やはり定季の没した宝暦7年から間もない祐清41歳頃の作とみられます。両将軍薨去の間に描かれた事実からして、その技量を窺ううえで注目すべき作品となります。

5万石という小藩の三春藩が専属の御用絵師を抱えた形跡はなく、藩主が亡くなるごとに、江戸で著名な狩野派の絵師に依頼して描かれたのがこれらの肖像画です。藩主の肖像画は追善儀礼の場には不可欠であり、どの藩でも制作されたはずですが、現在に至るまで歴代が揃って伝わる例は多くはありません。それゆえ、一つの藩が江戸時代を通じてどのように藩主の肖像画を制作したのか、その状況を伝える貴重な歴史資料とみることができます。



図5 狩野祐清英信「秋田定季肖像」(6代藩主・1726～57)

12. 東北大学附属図書館・ヴント文庫

W.M. ヴント蔵書

心理学・教授 阿部 恒之

心理学の祖は、ドイツ・ライプチヒ大学の W.M. ヴント (1832-1920) とされています。ヴントが没した 1920 年、千葉胤成^{ちばたねなり}はライプチヒ大学に留学しました。留学中の 1922 年、東北帝国大学に新設される法文学部心理学講座の教授就任要請の知らせが届きました。胤成はヴントの残した書籍、いわゆるヴント文庫を東北大学に持ち帰ることを決意しました。後に東北大学第 8 代総長となった佐武安太郎^{さたけやすたろう}などの協力を得て、齋藤報恩会から資金を調達し、ハーバード大学などの有力大学との競争を制し、ついにヴント文庫を東北大学に持ち帰ることに成功しました。計 15,840 冊にのぼる貴重な書籍は、今も東北大学附属図書館で大切に保管されています (図 1・2)。

さて、上記の経緯は、心理学研究室の行事記録簿である『大福帳』の冒頭に、胤成直筆の絵物語として紹介されています (図 3)。題して「ヴント文庫物語」。2 万円という、当時としては極めて高額な予算がかかりましたが、胤成はこう記しています。「金は一時の廻り

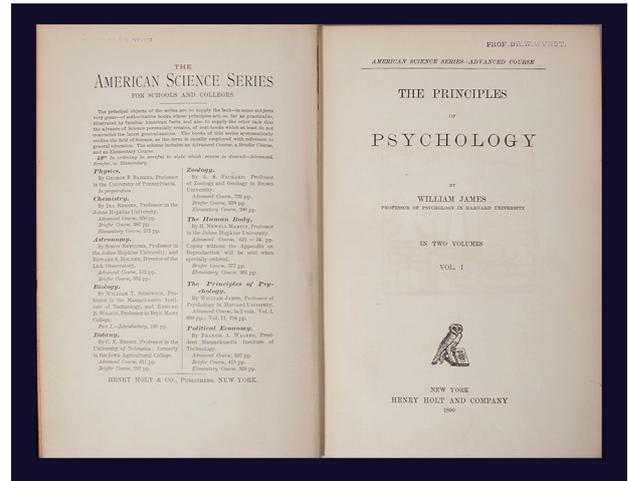


図 2 William James, *The principles of psychology*(V.1) ヴントと共に心理学の草創期を担ったアメリカのジェームズの著作「心理学原理」もヴント文庫に収められていた。ちなみに漱石文庫にも同じ書籍がある。

もの書庫は千載の寶 (千年の宝：著者注)！」

その中に、3300 という謎の数字が付されたマークがしるされています (図 4)。この謎が解けたのは、2015 年の 6 月、授業の一環で、学生たちとヴント文庫見学に行ったときのことでした。附属図書館職員の方のサポートで、このマークが、ヴント文庫の書籍に貼付された受け入れシールの模写であること、そして受け入れ番号 3300



図 1 東北大学附属図書館・ヴント文庫の概観



図3 心理学研究室蔵 行事記録簿『大福帳』



図4 謎の数字が付されたマーク

番は、“Psychologische Studien: neue Folge der philosophischen Studien”の番号だったことが判明しました(図5)。さて、“Psychologische Studien: neue Folge der philosophischen Studien”を和訳すると、「心理学研究：哲学研究の新規継承誌」となります。ヴントが主催していた『哲学研究』を、新たに『心理学研究』と改名した世界初の心理学専門学術誌の受入れ番号を、胤成は模写したのです。

100年前、法文学部心理学講座の開設時に取得したヴント文庫には、世界初の心理学の学術誌が収められているのです。胤成が手に入れた、東北大学の宝です。

(やなぎはらとしあき，大学院文学研究科長・文学部長
 たかはしあきのり，大学院文学研究科・文学部 教授
 おおきかずお，大学院文学研究科・文学部 教授
 にへいまさと，大学院文学研究科・文学部 准教授
 ほりゆたか，大学院文学研究科・文学部 教授
 かのまたよしたか，大学院文学研究科・文学部 教授
 ふじさわあつし，総合学術博物館 教授

(文学研究科協力教員)

にしむらなおこ，大学院文学研究科・文学部 准教授
 やたなおこ，大学院文学研究科・文学部 教授
 さいとうともひろ，大学院文学研究科・文学部 教授
 なおかりゆうさく，大学院文学研究科・文学部 教授
 すぎもとよしひさ，大学院文学研究科・文学部 准教授
 あべつねゆき，大学院文学研究科・文学部 教授)

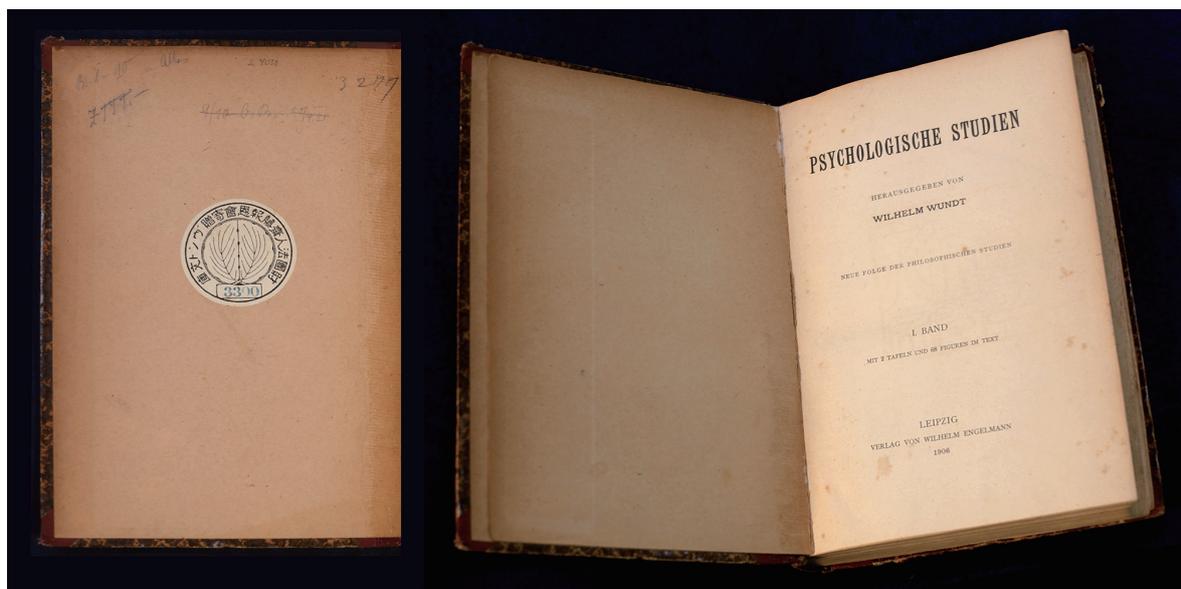


図5 Psychologische Studien: neue Folge der philosophischen Studien (心理学研究：哲学研究の新規継承誌)